

---

# コトダマ

亜耶

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

コトダマ

### 【Nコード】

N4578C

### 【作者名】

亜耶

### 【あらすじ】

手にした者に至上の幸福と万物の力を与えるという宝<sup>コトダマ</sup>石。その宝石を巡って沢山の戦乱が起きた世界で、盗賊を生業としていた青年シウはある少年と出会った。ルカと名乗る少年はシウに驚愕の依頼を持ち掛けた。「世界の最果てに連れて行ってくれたら《コトダマ》の在処を教えてあげるよ」——ライトでほんのりシリアスな冒険ファンタジー。

## 1・盗賊と少年（1）

世界には三つの大陸が存在している。

それらの大陸全てに伝わる伝説の宝石は、コトダマそれぞれの大陸の統治者、権力者達が喉から手が出るほど欲する幻の宝石だった。

その宝石を手にした者は至上の幸福と万物の力を手に入れる事が出来るといふ。

そんな伝説はこの世界に今まで沢山の戦乱を引き起こし、数多くの悲劇を生んでいた。

しかし未だかつてその宝石を手にした者はいないという――。

「早く《コトダマ》を見付けて楽に暮らしてえな。なあ、シウ」

藍色の麻で織られたボロボロの服を着た中年男が、横にいた青年

に話しかけた。シウと呼ばれた青年は褐色の瞳を中年男に向け、鼻でふつと笑った。

「小せえよ、オッサン。《コトダマ》を手に入れば、この世界の頂点に立つことだって出来るんだぜ？ 俺だったらそうするね。こんな盗賊紛いの生活なんて、もう、まっぴらだ」

シウは、少し伸びすぎかと思われる前髪をかきあげて言った。明るい茶色の髪は、後ろで三つ編みにされている。服装は中年男と同じく貧相で、その黒い布地はあちこち擦り切れていて、履いている革靴もボロボロだった。胸に光る銀のペンダントだけが、きらきらと光っている。

「おお、いいねえ、若いってのは。お前はまだ十五だもんな。夢を見るのは若い内の特権だ。俺は無理だけどな。こんな歳だし、この腕じゃなあ……。贅沢は言わねえ。楽に生きれりゃあ、いいんだよ」

中年男は、肘から先の無い右腕をひらひらと動かし、反対の腕でござごとと上着の内側を探り煙管を取り出した。そして片手を器用に駆使し、刻み煙草に火を点けると、美味そうに吸った。吐いた煙が日の沈みかけた夕空に溶け込んでいく。

そんな男を横目に、シウは胸に輝くペンダントを握り締め、呟いた。

「レレイ、見てろよ……」

「……………っっ……………」

ぴちゅん、ぴちゅん、と滴る水音で、シウは目を覚ました。暗くじめじめとしたその場所は――牢。シウは両腕を鎖で繋がれていた。氣絶していたのだろう、シウには鎖で繋がれるまでの経緯が全く分からなかった。ただ覚えているのは、いつものように盗みに入った家で、家主に見つかり、駆けつけた警備隊に殴られた事だけだった。

シウは口の中に溜まっていた血を唾と一緒に吐き出した。

「ちきしょう……………」

シウは呟いた。

世界は今、貧困に苦しむ者達と、金を持て余し自堕落な生活を送る者達との二層に分かれていた。

それは幻の宝石を巡る戦乱が原因だった。数多い戦乱の為、大陸に住む人々は疲弊していた。元々金を持っていた者達は戦乱の指揮者となり、戦など関係ない場所で、下層の庶民達を生きた戦乱の駒として扱った結果、親や肉親を失った子供が増え、餓死や強盗といった事が日常茶飯事に起きていた。その為、盗みや殺人を犯した者には重い罰が与えられるのだ。

盗みを働いた者には、その罪を印す焼き印がおされ、悪ければ処刑、良くてもし腕の切断という結末が待っているのだった。

「くそっ……」

もう一度、そう呟いた時だった。

「何をそんなに悔しがってるの？」

幼い子供の声、聞こえてくるはずの無い声がシウの耳に届いた。俯いていた顔を上げると、牢の格子を挟んだ向こう側に少年が立っていた。薄暗い牢だったが、シウには少年の銀の髪の毛がまるで発光しているかのように、はっきりと見ることが出来た。

「ねえ、何をそんなに悔しがってるのさ？」

思わずシウは表情を歪ませた。こんな場所に子供がいる事は、有り得ない事だ。

鎖に繋がれたシウを、格子を挟んで伺い見る少年。それは異様な光景だった。

「ここから出たい？」

銀髪の少年はにこりと笑いながらシウに尋ねた。

## 2・盗賊と少年(2)

「そこから、出してあげようか？」

突如現れた少年を、シウは訝しげに見据えた。

「出たいと思って出れたら苦労しねえよ。消えろ、ガキ」

そう答え、シウは再び口の中に溜まった血と唾を吐き出した。同時に、腕を繋ぐ鎖をジャラジャラと鳴らしながら、少年を威嚇する。そんなシウの前で、少年は今度はニヤリと意地の悪そうな笑みを浮かべた。

「えゝ、残念。出ないんだ？ 鎖はもう外れているのに？」

瞬間、シウはガクンとバランスを崩した。バランスの崩れたその体を支えようと、反射的に両手が先に地面に付く。それは鎖で繋がれていた筈の手だ。

何が起きたのか分からなかった。両手両膝を付き啞然とするシウは、つい今さっきまで繋がれていた鎖を見上げた。鎖はまだその場に残っていたが、一体何故外れたのかをそこから推測する事は難しそうだった。

「ね？ 外れてたでしょ」

格子越しに佇む少年はくすくすと笑った。啞然としつつも、そんな少年をシウは睨みつけた。

「僕が外してあげたんだよ？ 感謝してよね」

「ああん？ てめえ、何ふざけた事ぬかしてんだ」

シウとしては思い切り睨みを効かせた顔をしたのだが、少年は動じずにくすくすと笑い続けた。

「ねえ、早く牢から出てくれば？ せつかくここも開いたんだし」

少年がそう言った瞬間、ガチャリと音がした。鈍い金属音を発しながら、格子状の扉が開く。

シウは目を見開いた。

シウは扉に触れてはいない。勿論、それは格子の外に立つ少年も同じだ。

しかし扉は開いた。何故今まで閉じていたのかが不思議な位、それは自然だった。

普通ならば、人間はここで深く考え込むだろう。突然自分の身に起きた二つの不可思議な出来事に、首を傾げ、訝しげに思うだろう。しかしシウは深く考えることが苦手だった。結果、シウの頭の中でこの不可思議な出来事は、ただの警備隊の不注意で片付けられた。

「よっしゃ、ツイてる！」

ガッツポーズを作り、鼻歌交じりに早速格子の扉をぐり抜ける。しかし喜びも束の間、通路奥から話し声が近づいてくる事に気付く、シウは口を閉ざした。断片的に聞こえてくる会話から、見張りの警備兵がこちらにやってくる事を察知し、慌てて隠れる場所を探す。しかし、ぐりと辺りを見回したが、隠れられるような場所はない。仕方なく、シウは先程ぐり抜けた扉をまたぐり直した。

「おい、ガキ！ こっちに来い！ 見つかったらもうだろ」

シウは、手招きをして小声で少年によびつけた。しかし少年はニヤニヤと笑みを浮かべたまま突っ立っている。

「大丈夫。こっちには来ないよ」

「馬鹿野郎！ てめえが見つかったら俺だってやべえだろうが！ いいから、こっち来い」

シウは扉から手を伸ばし、少年の上着を掴むと、牢の中へと引き寄せた。

少年の着る上着はシウや盗賊仲間の着る衣服のそれとは違って、ひどくなめらかな感触だった。

わわっ、と声を漏らす少年を牢内へと引きずり込み、シウは少年の口を押さえた。そのままじっと隅で身を潜める。

しかし、すぐそばまで近づいて来ていたと思われる警備兵達の声は、シウの読みに反して遠ざかっていく。シウは少年の口を押さえたまま、鉄格子の中から、恐らく外へと続くだろうと思われる通路を確認する。

やはり警備兵達は戻っていったようだ。シウは安堵し嘆息した。

「危ないところだったな……」

安堵の声を漏らすシウ。その腕のなかで少年はもごもごと何かを喋りながらジタバタしだした。シウは慌てて少年の口を押さえていた手を離す。

「……ぶはっ！ だから言ったじゃん、来ないって。」

「あのなあ……、兵士共が戻って行ったからいいものの、こっちに来てたらお前も捕まるぞ。どこのガキだか知らねえけどよ」

その時シウは先程掴んだ時の服の感触を思い出した。滑らかな感触。自分の着るボロボロの麻の服の感触に比べると、天と地ほどの違いのある感触を。

「おい、ガキ！ お前どこから来た？

お前の親父の名前って何ていう？ まさかロウエン、ていう名じゃないのか？」

少年はシウから一気に質問をたたみかけられ一瞬目をまん丸くした。しかしその表情はすぐに笑顔に戻った。

「そうだよ。僕のパパはロウエンっていうんだ」

シウは、心の中で再びガッツポーズを作った。ロウエン——それはこの町の権力者の名だった。そしてこの少年はその息子だという。シウの心にある野望が生まれた瞬間だった。

「そつかそつか！ 迷いこんじまったのか？ 可哀相になあ……。よし、兄ちゃんが送っていつてやるよ」

シウは普段したこともない紳士的な微笑みを少年に向けた。慣れない動作に口の端がつりそうになるのにもめげず、精一杯微笑んで見せる。

少年はそれを見てくすくすと笑った。

「僕を誘拐でもするつもり？」

その問いに、シウは慌てて両手と首を振る。どこまでも大げさに、そしてどこまでも胡散臭く。

「まさかまさか！　ちゃんとロウエン様のお屋敷に連れてくさ！　俺はこう見えても善良な一市民なんだぜ？」

シウは、自分のつく嘘に吹き出しそうになったが、ここで吹き出してしまったら全部パアになると思い、なんとかこらえた。

「ふうん。じゃあ何でここに捕まってたの？」

少年の問いにシウは詰まってしまった。

この少年を誘拐し、多額の身の代金を手に入れる——目的だけは明確だが、それに至るまでの経過まではシウは考えていなかった。いや、考えつけるはずもないのだ。

所詮は思いついたばかりの、行き当たりばったりの野望だった。

「そりゃあ、アレだ。俺は無実の罪で捕まってたんだ。扉が開いてくれて助かったよ」

少年はじつとシウの目を見つめた。シウの言葉の真偽をはかるかのように。一瞬金色の少年の瞳が妖しく光ったが、シウはその前に目を反らしてしまった。

「そっか。じゃあ連れてってよ」

少年がシウに手を差し出す。

シウは差し出されて手をそっと握ると、少年は強く握り返してき

た。そしてにっこりと笑って言った。

「約束だよ。連れてってね」

### 3・盗賊と少年(3)

牢から地上へ出るまでの通路を、人が来ないものとびくびくしながら進むシウを、少年は笑いながらたしなめた。

「人なんて来ないよー、心配症なんだね。えーっと……」

「シウだ」

シウは囁くような声で少年に名乗った。

「シウ、人は来ないよ。心配しないで」

「あのなあ、人が来ない保証なんてないだろ。捕まったらお前は口ウエン様の息子だから見逃してくれるかもしれないけど、俺はそうもいかないんだ。焼き印なんか押されたくねえし。静かに歩け！」

小声で凄むシウ。

少年は、半分呆れたような顔で頷き、恐る恐る歩き進むシウの後を、大人しくついて行った。

しかし少年の言うとおり、見張り兵は、二人の元へと来ることは無かった。

「うーん、今日もいい天気だな！」

最高にいい顔をしながら、シウは地上に出てからの第一声を放った。

空は青く澄み渡り、雲一つ無い。適度な湿度に心地良い風。活気に溢れた町並みがそこにはあった。

日は真上に昇っている。人の寝静まった夜中に盗みに入り、すぐに捕まったシウが気絶している間に、半日以上が過ぎていた。

その事実気付いたシウはこぶしを震わせた。

「俺、結構長いこと気絶してたんだ……。野郎、ありったけの力で殴りやがって。今度会ったらただじゃおかねえ」

もう一方の手で後頭部をさする。こぶが出来ていた。  
ぼやくシウを見て、少年は笑った。

「お前なあ、笑うなよ。結構痛んだぞ……。えーっと、ロウエン……様のお屋敷はと……、あっちだな」

広い路地を右、左と確認しシウは少年の手を引き、遠くに朱色の瓦屋根の見える方へと歩き出した。

その歩みは意識してかしないでか少年の歩幅に合わせてられている。

「ありがとう、シウ」

「ああん？」

いきなりかけられた感謝の言葉にシウは眉をひそめた。少年はにこにここと微笑んでいる。

「ボクに歩く速さ合わせてくれてるんでしょ？」

シウは予想外の言葉に目を丸くした。

「あ？　そうか？　俺は別にそんな事してたつもりじゃねえけど……まあ、俺にはお前くらいの子ビの妹がいたからな。昔はよくこうやって手を引きながらよく歩いたもんだ」

シウは頭をぼりぼりと掻きながら答えた。

「妹、いるんだ？　いいなあ、ボク一人っ子だから羨ましいよ」

少年はシウと手を繋いだまま、口を尖らせた。

「ねえ、妹って何歳？　何て名前？　今どこにいるの？　一緒に住んでないの？」

シウの妹の話に興味を持った少年は早口で質問をいくつか投げかけた。その瞳は輝いている。

「……」

「何で黙っちゃうのさ」

そう言つと少年は、あつと声を漏らしその表情を陰らせた。

「俺の妹、レレイっていうんだけど……。三年前に死んだんだ。風邪こじらせちゃってなあ。両親もまだ俺が小せえ頃に死んだから、二人きりの家族だったのに……。薬、買ってやれなかったばっかりに、な……」

俯き少年の手を強く握る。足の動きがぴたりと止まった。

「……ごめんなさい、そんなこと聞いちゃって……」

「いいんだ。それに俺はレイと約束したからな。《コトダマ》を手に入れるって。《コトダマ》さえ手に入れられれば、万物の力も使えるだろ？ そしたら生き返らせてやるのさ。それで金持ちになるんだ。」

「……そっか」

少年はすっかりしゅんとしてしまっていた。手を握り返す力も弱くなっているのに気付いたシウは、大げさに少年に笑いかけた。

「おいおい、そんな顔するなって！ こんな世の中じゃよくあることだ。なっ？ それに《コトダマ》を見つければ済む話だ。妹も生き返って金持ちになれるんだったら一石二鳥だしな！」

シウのかけた言葉は耳に入らないのか、少年は暗い表情のままだった。シウは少年の手を引っ張り続ける。

「なあ、《コトダマ》ってどこにあるんだろうな？ 今まで誰も手に入れたことないだろ。一体どんな形で、どんな色してるんだろうな。金剛石みたいなんだろうか。それとも虹色に輝く宝石なんかなあ。お前はと思う？」

投げかけられた問いに少年は顔を上げ、うーん考える素振りをした。しばらく唸りながら考えているように見えたが、やはり表情は暗い。

最終的にはシウの問いは少年の、分かんないな、で片付けられた。

「何だよ、つまんねえな」

はそう言いながら舌打ちをしたシウは、目の隅でロウエンの屋敷を捉えていた。

さしあたつての問題は、少年を誘拐する為に、いかに怪しまれないようにあそこを通り過ぎるかだ。しかしなかなかシ良い方法が思い浮かばない。色々考えを巡らせる間にも、ロウエンの屋敷は近付いてくる。

「あ」

良からぬ方法を画策するシウの隣で、少年は小さく声をあげ、立ち止まった。

「んだよ」

シウは少年を見下ろした。

少年の金色の瞳はそんなシウを気にすることなく、真っ直ぐ正面に向けられている。

「……？」

少年の目線の先を追う。

そこには、この町の権力者ロウエンと、ロウエンに仕える数名の従者の姿があった。ロウエンはきよろきよろと辺りを見回していた。目が悪いのか、シウの隣の息子の姿には気づいていないようだ。

「やへ……」

少年を誘拐する為にどう上手く屋敷の前を通り過ぎるか――その心配は無駄になりそうだった。通り過ぎるところか、その前に親の迎えが来たのだから。

立ち止まる二人の姿に従者の一人が気付く。シウはその従者がロウエンに何か話しかけているのを見た。従者に話しかけられたロウエンの視線が、シウ達に向けられる。

「ルカ！」

細身の体のどこから出てくるのか分からない程の大きな声が、通りに響いた。ロウエンと従者達はシウ達の所へと走って来た。

シウの行き当たりばつたりの野望はその瞬間パアになった。シウががつくりと肩を下ろしたのは無理もない。

#### 4・盗賊と少年（4）

ロウエンと従者達はまっすぐシウ達の元へと向かってきた。

「んだよお、失敗じゃねえかよ」

血相を変えて向かってくるロウエン達を見て、シウは小声でぼやき、頭をポリポリと掻いた。

ロウエンと鉢合わせた今、少年誘拐計画を実践するわけにもいかず、シウは少年の背中をぼんと軽く叩き、行けよと促す。

しかし、少年の足は動き出す気配は無い。ぴつたりと地面についた足は、まるで根が生えてしまったかの様に微動だにしなかった。

「……おい、何立ち止まってんだよ？ 親父さんのお出迎えだぞ」

しかし、シウがそう声をかけても、少年は全く動こうとしない。

シウは屈んで少年の顔を覗き込んだ。少年は能面の様な表情でロウエン達を見つめている。

そしてシウが聞き取れない程の小声で何かをぼそりと呟いた瞬間、金の瞳が妖しく光った。

——その時だった。

「……っ！ 止める！ ルカ！！」

大通りにロウエンの悲痛な叫びが響いた。

少年の金の瞳に氣をとられていたシウは、その声にはっとして、声の方向に振り返った。

シウの視界に入ってきたのは信じられない光景だった。

「下ろせ！ 下ろせえっ！」

ふわふわと宙に浮かぶロウエンの体。そしてその周りには慌てふためく従者達。

シウは、目をごしごしと擦った。しかし目の前で今、まさに起きている出来事は、夢でも幻でもない。

「何だよ……これ」

ロウエンは足をバタバタと動かし懸命にその状況から逃れようとしていたが、一向に状況が変わる気配は無かった。むしろその体はますます高く浮かび上がっていく。その表情は恐怖で歪んでいた。

「おい、お前の親父さんが……」

そこまで言いかけて、シウは少年の姿を見た。そしてその異様な姿に驚愕し、

少年の隣から半歩後ずさる。

少年の瞳は、先程よりも更に妖しい光を放っていた。何かをぶつぶつと呟いているが、シウには聞き取れない。

空中から聞こえてくるロウエンの叫びが、更に悲痛なものとなったのは、シウが眉をひそめて少年を見ていた時だった。

「ルカアー！ 下ろせえー！！ 許さんぞおー！」

ロウエンの体は、高く高く登り続けている。やがて、視認できるロウエンの体は豆粒程に小さくなり、その叫び声も段々と小さくなっていった。

決してロウエンの叫び声が小さくなったのではないことは、その

場にいる誰もが分かっている。高く登ったロウエンの声が、地上にいるシウ達の耳に届きにくくなってきているのだ。

「僕は帰らないよ、って言ったの聞いてなかった？ 『パパ』？」

少年は冷たく言い放った――が、しかし空高くにいるロウエンの耳にその声は届いていないだろう。

少年の言葉に反応したのはロウエンの従者達だった。

「貴様っ！ ロウエン様を下ろせ！」

従者達は懷から短刀を取り出しシウ達めがけ走り出した。まさか少年を狙っているとは思わないシウは、手を振りかざし叫んだ。

「ちよっ、待てよ！ 俺は何も――」

シウが目を閉じた瞬間、少年の甲高い声が響いた。

「止まれ――！」

「……………ん？」

何も起きないことを不思議に思い、シウは目を恐る恐る開けた。そして同時に目を見開く。

「は……ははっ」

思わず笑いが込み上げてきた。

自分を傷つけようと向かってきたと思っていた従者達の体が、まるで時が止まってしまったかのように固まっているのだ。短刀を掲げ、走り向かってきている姿で固まった従者達の姿は、まるで躍動感溢れる彫刻の様に微動だにしない。

そして、シウが自分の体の異変に気付いたのは、その従者達の元へ行ってみようと動き出そうとした時だった。

「あ、れ……？ 何だ、体が動かねえ……っ」

シウの体も目の前で彫刻の様に静止したロウエンの従者達と同じ様に、動かなくなってしまうていたのだ。

シウは、唯一動かせた目だけを懸命に動かし周囲を伺った。そんなシウの視界に、少年の顔が映り込む。

「ねえ、さっき約束したよね？」

少年の瞳は、いまだに妖しく光っている。シウは目の前にやって来た少年の目線に合わせて答えた。

「な、にを……？」

その言葉に、少年は金色の瞳を細めてにっこりと微笑んだ。

「連れてってくれるって言ったよね？」

シウは少年の言っている意味が分からず首を傾げようとしたが、やはり体は動かなかった。

「連れてくって……、屋敷までだろ？ 連れてきてやっただろ……？」

「僕、一言も屋敷に連れてってなんて言っていないけど？」

「は……っ？」

シウの言葉にそう答えた少年はくりと後ろを向くとすたすたと歩き出した。シウはますますわけが分からなくなり、目線だけで歩き出した少年の姿を追った。空中に浮くロウエンの真下辺りに辿り着くと、少年は足を止め、見上げた。

「そろそろ落ちとく？」

少年が言った瞬間、ロウエンの体がガクンと揺れた。そして――凄まじい速さでロウエンの体が落下してきた。

「うわ、わああああああー！！」

ロウエンの死に物狂いの叫びが大通りに響いた。ロウエンの体が少年の体にぶつかりそうになった瞬間、ぴたりとその動きは止まり、そして静かに少年の体から軌道を逸らしてゆっくりと地面に到達した。

ロウエンはぴくりとも動かない。落下速度と恐怖に耐えきれず失

神してしまったからだ。

シウはその現実離れした光景をずっと見ていた。

「お前……がやったのか？」

少年はゆつくりと後ろを振り返った。その表情には不敵な笑みが浮かんでいる。その笑みを浮かべたまま、少年はシウに近付いた。

「もう体動くんじゃない？」

少年が言った瞬間、シウの体はガクンとバランスを崩し、そのま  
ま前のめりに倒れ込んだ。

「おわっ！」

べしゃっという音と共に崩れたシウが顔を上げると、少年は眼前  
にしゃがみこんでいた。

「ね、連れてってよ」

「ああ………って、あれ!？」

少年の言葉にいい返事をしてしまったシウは、思わず口を押さえた。自分の意志と関係なしに口が動いたのだ。まるで自分の口ではないかの様に出た言葉に、シウは驚きを隠せなかった。

「言ったね？ 僕のこと、ちゃんと連れてってよ？ 約束、だよ」

くすくすと笑う少年は、金の瞳を細めて言った。シウは驚きながらも少年に尋ねる。

「……屋敷じゃないなら、どこへ連れて行って言うんだよ」

「うーんとね、果て。世界の果てに連れて行ってほしいんだ」

「はあ？」

何もかもが現実離れたこの状況で、突拍子もないことを言い出した少年の言葉を、シウは理解できないでいた。

「果てって何だよ……？　ロウエンの息子がそんなところに何の用があるんだよ……？」

聞き返したシウの言葉に、少年は一瞬目を丸くする。そして声を上げて笑った。その表情は今まで見せてきた不敵な笑みとは違い、年相応の少年の笑顔だった。

「あんなのホントの『パパ』なんかじゃないよ」

「でもお前、牢ではロウエンが父親だって——」

そう言いかけてシウは口をつぐんだ。

いかに単純で短絡的なシウの頭でも、この非現実的な状況は少年が作り出したことくらいは理解出来たからだ。

「……いいよ、そんなこと。それより果てまで連れてってくれたら、『コトダマ』の在処教えてあげるよ」

この状況を理解する為に、脳をフル回転させていたシウも、今の少年の言葉は聞き逃さなかった。

「『コトダマ』？ お前『コトダマ』の在処を知ってんのか！？」

「うん。だから——」

少年の発した『コトダマ』の在処、という言葉は、この非現実的な状況进行处理しようとするシウの脳の働きに、完全なるストッパーをかけた。

「おう！ 任せろ！ 果てでも何でも俺が連れてってやる」

立ち上がり、衣服に付いた砂埃を払いながら、シウは笑顔で答えた。

そんな彼の表情を見て少年はまた大きな声で笑う。

「やったあ！ 絶対だよ！」

「分かった、だから……」

少年は分かっているよ、と言わんばかりに肩をすくめた。

「約束するよ。よろしく、シウ」

『コトダマ』の在処を教えることに喜び、舞い上がってしまったシウは、先程少年を少しでも不審に思ったことは、すっぱりと頭の中から抜けてしまっていた。

「おう！ よろしくな、えーと……」

「僕のことはルカって呼んで」

そう言うてにつこりと笑った少年はシウに手を差し出した。シウは差し出された手を右手で取ると、少年に負けじと満面の笑みを作った。

そして、二人は歩き出す。騒ぎに集まってきた人々は、啞然として二人を見ていた。騒ぎを聞きつけた町の警備兵達も、うつ伏せにひれ伏し動かない領主と、彫刻の様に微動だにしない従者達の有り様を見て呆然としている。

町の出口まで差し掛かったとき、ル力は、あつ、と声を漏らした。くるりと後ろを振り向くと、大通りの方向に向き直ると、大声で言った。

「もう従者さん達も動いていいよ！」

発された少年の言葉に、シウは色々な考えを巡らしたが、すぐにその考えは頭の外へ押し出された。

シウにとって大事なことは、不可思議な状況を考察することよりも、ル力を世界の果てに送り届け、一日も早く『コトダマ』の在処を教えてもらうことだったのだ。

「行こっか、シウ」

ル力にはにつこりと微笑みシウに言った。

「ああ」

こうして盗賊と少年という奇妙な二人組の、世界の果てを目指す旅は始まった。単純な盗賊、そして何やら不思議な力を持つ少年。

彼らの行き着く先に待ち受けるものを、シウはまだ知らない――。

#### 4・盗賊と少年（4）（後書き）

更新が遅くなっていました。読んで下さっている方、遅筆な作者です  
いません。今後も読んでいただければ幸いです。

## 5・遭遇（1）

「ところで、世界の果てってどこだ？」

町外れの平原に間の抜けた声が響いた。

地べたに座り眉間に皺を寄せながら、広げた地図を唸りながら見ているのはシウだ。穴が開いてしまいそうなほど紙面を凝視しているが、今、自分のいる場所すら分かっていないシウに、世界の果てがどこなのかは、分かるはずもなかった。

シウの世界は小さかった。

ロウエンの治めるカイランの街から、シウは出たことがなかったのだ。カイランの街の、最下層の者達が住む区画に生まれ、盗賊として腕を磨き、そしてその街で一生を終えるはずだった。シウはその事に不満も疑問も抱くことは無かったし、それがカイランの下層地区に生まれた者の、一つの道でもあった。

知る必要などなかったのだ。日々の生活すら苦労していたシウに、自分の生きる以外の世界のことなど。

「ここだよ、ここ」

うんうんと唸るシウに痺れを切らした少年が、シウの背中に飛び乗って地べたに広げた地図の右端を指さした。

中央に大きな大陸を構え、左右にそれぞれ細長い島が描かれた地図を、シウは顔面に持ち上げてまじまじと覗き込んだ。一定時間その体勢で動きを止めていたシウは、大きく息を吐いて地図を投げ出した。

「はあ、こんなところまで何しに行くってんだ、お前」

とりあえず果てしなく遠いことだけは理解できたシウは、大きく息を吐いた。

「ボクの生き別れた兄弟がいるはずなんだ」

「はあ！？ マジか？」

「ふふ、嘘だよ」

終始ルカが主導を握る短いやり取りが済んで、二人は立ち上がった。

シウは投げ出した地図を拾い上げ懷にしまうと、尻に付いた土を払った。

「そんじゃ、行くとしますか。世界の果てってところに」

腰と額に手を当て、遙か地平線を見据える。長い長い旅の始まりだ。大きく息を吸い前へと踏み出す。

しかし悲しいかな、小さな世界の住人であったシウに、目的地までの道順など分かる術はなかった。

「ち、ちよつと待ってよ、シウ！」

ルカの焦る声が飛ぶ。

踵を返し向き直ると、少年の足はまだ一步も進んでいない。

「なんだよ、ルカ。早く行くぞ」

「うん、行くよ。行くけれども……」

ルカも踵を返す。

シウとは逆方向を向き、首だけで振り返った。

「そつちじゃないよ」

「……………」

「……もしかして方向音痴なんだね」

遠くのカラスの鳴き声を背に、ぼそりと呟く。そんなルカのほうに向き直りシウはあっけらかんと言いつ放った。

「まあまあ、なんとかなるって」

逆戻りする自分の姿に不安を抱くルカに、シウはとびきりの笑顔を向ける。

先が思いやられる、と幼いながらに察しながらも、ルカはあえて笑顔で正しい道を指した。

「……とりあえず、ここから北上したところにダヤっていう村があるはずだから、そこに向かおう」

「おう」

世界の地理などさっぱり分からないシウは、ルカに言われるがままに頷いたのだった。

「おっ！　ここがダヤか、近いもんだな」

初めてカイラン以外の集落に足を踏み入れたシウは、子供のよう  
に声を上げた。

「……結構小せえな」

加えてぼそりと呟く。

そんなシウの呟きを聞いて、ル力は苦笑した。

「そりゃあカイランに比べたら小さいよ。一応カイランは、中央大  
陸で三番目くらいに大きいんだから」

「へえ」

シウは気のない返事をした。

いくら小さな村であったとしても、彼にとっては初めての経験。  
好奇心は尽きない。

目を輝かせながら、縦横無尽に視線を巡らせるその姿は、誰の目  
から見ても怪しいものだった。事実、村の住人達は明らかにシウを  
避けている。

「シウ、ちょっと落ち着いてよ！」

後から隠れるようにしてついて来るル力は、小声でシウに呼びか

ける。しかしそれくらいでおとなしくなるような男ではなかった。

カイランの北に位置する村、ダヤ。

シウは小さいと言うが、各地にある村の中では比較的大きな規模となる。もちろんそれは、カイランに近いからというのが最たる理由ではあったが、もうひとつ別の理由もあった。

しかし、シウは別段そんなことを気にかけることはなかった。それよりもなによりも、彼の視線を釘付けにしたのは目の前の人だからだった。

「ん……？　なんだ、あのひとだから」

いきなり立ち止まったシウの体にぶつかり、ルカは鼻を押さえながら見上げた。

「なに？　どうしたの？」

「なんか揉めてるみてえだな」

ふうん、とルカは頷いた。

確かに人だからからは怒声のようなものが聞こえる。そういうものとは極力関わり合いにならないほうがいいことを、ルカは知っていた。

しかし、先を急ごう、と促そうとするも時すでに遅く、シウは人だかりに向かって走り出していた。

そんな後ろ姿を見ながら、ルカは肩をすくめ苦笑した。

「……ほんと、世話が焼けるなあ」

人だかりをかきわけ、前列へと進み出たシウが見たのは、三人のゴロツキと、それに対峙する一人の身なりのいい端正な顔をした青年だった。その後ろには、青年に庇われるようにして身を潜める少女がいる。

三人のゴロツキは、一人は尻餅をつき、一人はそれを起こそうと手を伸ばし、残る一人が鼻息を荒くしていた。

「おい、テメエ！ なにしてくれんだ！」

ゴロツキが叫ぶ。人が集まってきていることにも気付かないほど、頭に血が上っているようだ。

そんなゴロツキ達の前に立つ青年は、束ねた漆黒の長髪を後ろに払いながら、涼しい顔をしている。

「その台詞、そのままそっくりお返ししますよ」

につこりと微笑みかけてから、青年はその場に屈むと、流れるような所作で、足下に散乱する何かをその手に取った。

「この村の特産である毛織物をこんなにしてしまうなんて……愚の骨頂とは思えません」

青年は嘆息し、手に取ったものを広げた。ばさりと音をたてて広げられたもの、それは毛織物だった。本来であれば、美しい幾何学模様が描かれていただろうそれは、ぐしゃぐしゃに踏みつけられ泥と汚れとにまみれている。壊れ物を扱うようにして、その汚れを優しく叩き落とすと、青年は自らの背に隠れる少女に手渡した。そし

て再びゴロツキ達に向き直る。

「さて」

端正な顔に笑みを浮かべ、青年はずいと進み出た。

深い青色の瞳で、射抜くようにゴロツキ達を見据える。

「愚かなあなた達には、制裁を与えねばなりませんね」

にこやかに、青年はそう言い放った。

## 6・遭遇(2)

「な、な、なんだと！ テメエ！」

青年の言葉に激昂したゴロツキが声を上げる。額に青筋を浮かべ、怒りに震える手で懷から短刀を取り出した。対して青年は丸腰だ。しかしその表情には、どこか余裕がある。

「おいおい、まずいんじゃないの」

目の前で対峙する彼らを見て、シウは呟いた。

武器を持つ屈強な体を持ったゴロツキは三人、それに相對するのは華奢な体つきの青年一人。しかも青年は武器を持たない。誰が見ても、青年のほうが分が悪いのは明らかだった。

「ふふ、武器を持って強さを誇示するのですか？ それで私がひれ伏すとても？ ……ますます愚かな」

静かに笑みをたたえたまま、ゴロツキ達を挑発するように言う。から、青年は大きなため息をついた。微動だにせずに、侮蔑の浮かんだ視線を向ける。

「テメエ……おい、お前ら！ やっちまえ！」

完全に怒り心頭のゴロツキ達が唸った。短刀をかがげ、三人同時に青年に飛びかかる。

シウはもちろん、そこに集まる誰もが目を覆った。

「ぐあぁっ！」

刹那、野太い悲鳴が辺りに響いた。

しかしその場に集まる人々が見たのは、想像していたものとは違う光景だった。

「いてえっ！ 離せっ、離せガキがぁ！」

情けない悲鳴を上げていたのは、ゴロツキの一人だ。武器を持た手を捻り上げられ、四つん這いに押し倒されている。残り二人は横に転がり、目を回していた。

黒髪の青年は、ゴロツキの上に腰かけ余裕の笑みを浮かべていた。じたばたともがき、顔を赤くしながら大汗をかいているゴロツキとは正反対に、息すら上がっていない。

「ふふ、いいザマですね」

青年は短刀を取り上げると、その手の上でくるりと器用に回し、ゴロツキの首に刃をあてた。笑みを浮かべ、丁寧な口調ではあるが、容赦なく刃を押しつけている。

青年が本気であることに気付いたゴロツキは、悲鳴にも似た声を上げた。ガタガタと震え、懇願する。

「や、やめてくれえ！ 頼むっ！ これは返す。返すから……命だけは……っ！」

辺りに悲鳴が響いた。

ゴロツキのものだけではない。今この場所にいる人々の中からも、それは漏れ聞こえた。

その時だった。

「……おい！ そのくらいにしとけよ！」

勢いよく飛び出したのは、シウだ。

誰もが、突如声を発した彼に、視線を向けた。

シウはゴロツキに腰掛ける青年の元まで、そのまま進み出た。その歩みに迷いはない。

「もう勘弁してやれよ。あんただって、殺す気はないんだろ？」

そう言ってゴロツキを指さす。

ガタガタと震えるゴロツキと、笑みを浮かべたままの青年は、顔を上げた。ゴロツキの顔は恐怖に歪み、脂汗でまみれている。対して青年は涼しげな笑みをシウに向けた。

「……君は？」

ゴロツキから決して刃を離すことなく、青年が尋ねる。

「俺のことはどうでもいいよ。それよりも、事情は知らねえけど、ソイツ謝ってんだろ？ もう離してやれよ」

「ふふ、旅人ですか？ ずいぶん甘いことをおっしゃるんですね」

そう言って、青年は自らが腰掛けるゴロツキを見下ろした。その表情は相変わらずにこやかだ。

「そんな甘さが、このような者達を生み出しているというのに。世界に何の貢献もせず、それどころか、民の生活をも脅かすようなま

ねをするこんな悪党が、ね」

ふふ、と笑って青年は短刀を逆手に持ち替えた。刃は首もとから離されたものの、今度は二の腕に当てられる。ぎりと捻り上げられた腕はやはり動かすことが出来ず、ゴロツキはただ悶えていた。

「馬鹿な男です。この村の特産——花羅織りを盗み、儲けようとでもしたのでしょうが……。見つかったあげく、少女を人質に、逃げようとするとは」

長い睫をふせ、青年は大きく息を吐く。震える男に刃を向けたまま、力を弛めることもなく、淡々と状況を喋り出す。

シウは、背中を冷たい汗が流れていくのを感じた。今のこの状況は人事ではなかった。恐らく自分も、この青年の言う悪党に分類されるのだから。

変な仲間意識にも似た思いが、彼を饒舌にさせた。

「もうソイツも懲りてるさ！ だから、ほら、そんな物騒なモン置けよ」

「……た、助けてくれよぉ」

ゴロツキと目が合う。

屈強な男の目には、よほど恐怖しているのか、うつすら涙が浮かんでいる。

青年はその姿に視線をちらりと向けたが、すぐにシウに戻した。そして、憐れみも何も感じていないといったような表情で、首を傾げた。

「この悪党が更生するとても？」

シウは力強く頷いた。

それを見て、納得いかない顔をしながらも、青年はゴロツキからゆっくりと腰を上げた。それと同時に、ずつと捻り上げられていた腕を抱えながら、ゴロツキはよろりと立ち上がる。

ほっと胸をなで下ろした瞬間だった。

「きゃああつ！」

「くそつ、くそう！ 馬鹿にしゃがつて！ 誰が大人しく出て行くものか。だれか、ありったけの花羅織りを持ってこいっ！」

ゴロツキは、その場に集まっていた村人の中から一人の女を押さえ込むと、隠し持っていた別の短刀をその頬にあてた。脂汗と涙とで酷いことになった顔で喚き散らしながら、後ずさる。

「お、おいっ！」

シウは叫んだ。

しかしゴロツキは、悲鳴を上げる女に刃をあてたまま、それを離そうとしない。興奮している分、それは危険な状態だと言えた。ゴロツキの持つ短刀の刃は、いつ女を傷つけてもおかしくない。

「お前、やめろよ！ 早く逃げろよ！」

「うるさいうるさいっ！ 早く花羅織りを持ってこい！ じゃねえとこの女がどうなっても知らねえぞ！」

シウの言葉にゴロツキは耳を貸そうとしなかった。むしろこちら側が声を発すれば発するほど、ゴロツキは興奮していった。

その喚き声を背に、ふふ、と小さく笑い声が聞こえ、シウは振り返る。そこには、俯き肩を震わす青年がいた。

「だから言っただでしょう」

青年が言う。その声はひどく高揚していた。

「悪党にとって必要なのは、許すことではないのです」

くつくつと笑い、青年は顔を上げる。端正な顔に美しい笑みを浮かべ、足を踏み出した。同時に、ゴロツキは後ずさる。近付くな、と叫ぶが、青年は動じない。

そして、青年の体がふわりと舞った。

軽やかにステップを踏むようにして、青年は瞬時にゴロツキの懷に飛び込む。女の体を、いとも簡単にその腕から奪い取ると、持っていた短刀を勢いよく振り下ろした。

今度は、誰もがその瞬間を見ていた。舞いを踊るように軽やかな動きで、青年はゴロツキの二の腕に短刀を突き立て、その刃を勢いよく引き下ろしたのを。

「ぐああっ！ ああ……ううう……っ」

ごとん、と音をたてゴロツキの腕が地面に落ちた瞬間、辺りは悲鳴に包まれた。ゴロツキが呻く。

「腕があ……俺の腕があ……っ」

つい今さっきまでであったはずの腕の傷に手をあて、地べたに転がるゴロツキ。

青年は、青ざめガタガタと震える女を傍らに寄せ、笑みを浮かべ

ていた。

「必要なのは、制裁です。……もう一度と愚かな真似ができないように」

痛い痛いと呼くゴロツキを、青年は足蹴にして笑った。

「殺されないだけありがたいと思うことですな」

高らかな笑い声を上げながら、青年がそう言い放ったのを、シウはただ呆然として聞いていた。

## 7・遭遇(3)

辺りは異様な雰囲気に包まれていた。

ごくごく平和な村であるはずだった。花羅織りと呼ばれる美しい毛織物を特産とし、カイランからほど近い場所に位置する、素朴な村であるはずだった。

その村が今、血なまぐさい惨状が繰り広げられている。数名のゴロツキの悪行を見かねた青年による、制裁——しかし血を伴うその行いは、村人達を震撼させるのには十分だった。

「うう……あああ……」

血だまりでゴロツキは呻いている。

そんな悲惨な姿にした張本人である青年は、高笑いを鎮めた後も、ただそのゴロツキを見下ろしていた。

シウは今までないほどに、鼓動が早まっていくのを感じていた。今回はこのゴロツキだった。しかし、次は我が身だ。自分のしていたことは、そういうことなのだ。けれど――。

「……やり過ぎだよ」

誰かが、小さく呟いた。

それに呼応するように、辺りがどんどん騒がしくなっていく。ゴロツキに一時は人質になっていた女でさえ、口元を押さえながら青年の元から離れようと、後ずさっている。村人数名は血まみれになりうずくまっているゴロツキの元へと駆け寄り、腕の止血を始めた。ゴロツキに蹂躪されようとしていた村を救ったのは、確かに青年であることに間違いはないが、今は完全に違う状況になっていた。

シウは、村人達の畏怖の対象となってしまった青年を見た。

青年は、笑みを浮かべてはいなかった。ゴロツキを介抱しようとする村人達に視線を向け、ただその場に立ちつくしているように見えた。

上等なものであろう衣服も、細く長い指も、血にまみれたその姿に、シウは身震いした。

「……………ウ。……………シウってば！」

その時やっと、シウは傍らにルカがやって来ていることに気付いた。

ルカはずっとシウの服の裾を引いていたようだった。その部分が一変に伸びきっていたのだ。

「行こう。早く！」

ルカが急かす。

結局、シウはルカに引かれるようにしてその場を去った。

「ていうかさ、シウは緊張感が足りないよ！」

裾を掴まれたまま、逃げるようにして村から出た後、ルカは語気荒く言い放った。

「な、何だよ」

少年らしくないその気迫に、シウは若干面食らいながら、答える。  
そんな情けないシウの言葉を聞くやいなや、ルカは立ち止まり、  
勢いよく振り返った。

「あのさ、シウはカイランで捕まってたんだよ？　ボクが助けなかったら、きっと今頃裁かれてたはずでしょ」

「あ、ああ」

「まだそれほどカイランから離れてないんだから、あんまり目立つようなことはしないでほしいんだよね」

そう言ってルカは頬を膨らませた。

しかし、そう言ったものの、実のところダヤよりもカイランで牢から逃げ出した後に起こした騒動のほうが、はるかに目立っていたことも、ルカは分かっていた。

しかし、あえてそれは言わない。

目立ちはしたものの、あの件が今後に与える影響が少ないことも知っていたからだ。

「……………悪い。でも、あのゴロツキだって、生きることには必死なんだと思ったら、つい」

シウは嘆息した。

あのゴロツキの行為を肯定するわけではない。けれど、そうしなければいけない——そうせざるをえない状況なのだろうことも、盗賊であるシウはよく分かっていたのだ。

「まあ、人質とるってのは、やり過ぎだろうけどな」

空を仰ぐ。

いつの間にか空は赤く染まっていた。

「……今日は野宿か」

ぼそりと呟く。

本来であれば、宿の暖かい布団にもぐれると思っていただけに、シウはがつくりと肩を落とした。

そんなシウを見て、ル力はクスリと笑った。シウが肝心なことを忘れていることに、ル力だけは気付いていたのだ。

「シウ、もともとお金なんて持ってないでしょ？」

その言葉に、シウはますますうなだれた。金があるなら、盗賊なとしていないのだ。

「くそっ……、世の中やっぱり金なのかよ」

がくりと膝を落としたシウが呻く。そんなシウの肩に、ル力はポンと手を置いた。

顔を上げたシウが見たのは、初めて出会った時のような、意地悪な笑みを浮かべた少年の顔だった。

「そんな貧乏なシウに、いい話があるんだ」

「イサラ様、あなた様自らあのようなことをされなくても……」

ダヤの村の宿、その中でも一等高級な部屋で、白い装束を纏った女が跪いていた。女の前には、その日この村でゴロツキに制裁を与えた、漆黒の髪を持つ青年が立っていた。

「問題ありません。それに、ここに来たいと言ったのは私ですからね。わざわざあなたの手を煩わせる必要もないでしょう」

跪く女に立つよう促して、青年——イサラは革張りのソファに腰かけた。そして傍らに置いていた花羅織りを、その手に取り、まじまじと眺める。

「美しい……まさに芸術品。やはりこの村までわざわざ足を運んだ甲斐がありました」

美しい幾何学模様は、手織である為、二つと同じものはない。それに加えて、繊細な色づかいも、上質な手触りも、全てが芸術に値するものだ。

イサラは一通り眺めた後、丁寧に折りたたみ再び傍らに置いた。

「カリン、私は休みます。明日からは、いつも通り公務をこなさなければいけないですからね」

「はっ」

カリンと呼ばれた女は、イサラの上着を受け取ると、一歩後ずさった。

「あなたももう休みなさい、カリン」

柔らかな笑みを向け、イサラは寝室へと向かった。カリンはそれを見送ってから、上着を丁寧にたたみ、小さく嘆息する。

この役目を負って、彼女はまだ日が浅い。それにしても、今日の出来事は彼女の失態であった。仕える主の手を汚させるようなことなど、本来あってはならないのだ。

「……しっかりしなければ」

カリンは頬をぴしゃりと打った。背筋を伸ばし、大きく深呼吸する。

そして、いまだ未熟な自分に言い聞かせるようにして、呟いた。

「全ては我が主、イサラユエシユルツ様の為に――」

## 8・レッツ労働

「ルカさんよ」

「なあに？」

港町カルカンド——中央大陸北部に位置する港町。漁業はもとより、別の大陸から寄港した者達で溢れる港町は、同時に商業も発達していた。

沢山の人々でざわめくその場所で、二人は相反する感情を込めながら、目を見合わせた。

怒りのオーラを放つシウは、腕組みをしながら目の前の少年を見下ろしている。対してルカは、笑いを堪えているかのように口元をひくつかせながら、青年を見上げていた。

「いい話って……これじゃあ、まんま仕事じゃねえかよ！ 何で今更フツーに働かなきゃいけねえんだよ」

片手に白タオルと靴墨、もう片手に木製の即席看板、足元には自分用の椅子と小さな台がセットされている。

「靴磨きだつて立派な仕事だよ」

そうきっぱりと言い放ってから、ちらりとシウの額に目をやる。白いはちまきが眩しい。

。手に持つ看板にはこう書かれていた。『靴磨きます。一足五リン』

「何で俺が、どこの誰かも分かんねえヤツが差し出した、きつたねえ靴を磨かなきゃなんねえんだよ。しかも一足五リンだあ？ ガキの小遣いじゃねえんだぞ」

シウは憤慨していた。

金が必要な今、稼ぐ為に仕事という名の手間をかけるのは、百歩譲って目を瞑るとして、五リンは安すぎる。

今時、五リンで何が買えるだろうか。パン一切れ——それが妥当だ。

「靴磨きはそれくらいが相場だよ」

そう言っただけでシウは持つ看板を手を取った。とりあえず座って、と促しシウを座らせると、甲高い声で叫ぶ。

「靴磨きいかですかー！ 一足たったの五リン！ 今日だけの出血大サービスだよ！」

辺りはだいぶ騒々しいが、ルカの高い声はよく通った。そのルカの言葉の矛盾を、シウは聞き逃さなかった。

「てめ……っ、今出血大サービスって言っただろ！ やっぱ相場じゃねえんだろ！」

立ち上がりルカを捕まえようとするシウ。しかし、時すでに遅く、格安の靴磨き職人の前には人だかりが出来ていた。

「安いじゃないか、キミ。早速頼む」

ずいと現れたのは、短い口髭をたくわえた初老の男だ。身なりのいい男は、それだけで値打ちのありそうな靴を履いた足を台に乗せた。

「ま、待ってくれよ！ 俺は……」

首を振りながら、ルカを探す。いつのまにかずらりと列を為した最後尾に、看板を持つ少年はいた。

「さあ、早く頼むよ。後がつかえてしまっているよ」

並ぶ人数はざっと数えて二十名ほど。シウはかぶりをふりながら、呟いた。

「……マジかよお……」

しぶしぶ座り、覚悟を決める。こうなったらやるしかないのだ。

シウは目を見張るほどのスピードで、次々と靴磨きをこなしていった。

どこから呼び込んでくるのか、なかなか減らない列と格闘し、慣

れない労働を終えたシウは疲れ果て、ぐったりとうなだれていた。

「お疲れ様、シウ」

少年がねぎらいの声をかけると、シウは顔を上げぎろりと睨んだ。しかしルカは、満面の笑みを浮かべ怯まない。

「……てめえのせいだとんだ苦労だ」

しかしよほど疲れているのか、表情とは裏腹に、声には覇気がない。そして再びうなだれた。

そんなシウを見て、ルカはくすりと笑う。

「ほら、立って！ 宿に行こう！ もう予約してあるんだ」

「……どうせ今稼いだ金なんか、たった一泊で飛ぶんだろ……」

ぶつくさと後ろ向きな言葉を吐くシウの背を押しながら、ルカは宿へと急いだ。

「いらっしやい！ 待っていたよ」

港町カルカンドの宿で二人を迎え入れたのは、いかにも女将らしい雰囲気の花嫁だった。

「部屋は二階だよ。疲れてるだろう？ 食事の時は呼んであげるか

ら、ゆつくりしてなよ」

サバサバとした口調と満面の笑みで、女は階上を指差す。

二階建てのその宿は、随分と質素ではあったが疲れを癒すには十分だった。しかも食事付きだと聞いて、シウは子供のように目を輝かせた。

「おつ、食事付きか！ いいところ見つけてきたな！」

シウは階段を駆け上がり、部屋のドアを開けると、勢いよくベッドにダイブした。幸せそうな顔で大きく息を吐く。

そんなシウに遅れて部屋に辿り着いたル力は苦笑した。

「落ち着きないなあ、シウは」

「だってよ、こんなフカフカな布団で寝れるの久しぶりなんだぜ？  
いつもはカツチカチの煎餅布団でよお……」

そのあまりの肌触りの悪さを思い出して、シウは鼻をすすった。  
薄くて硬くてボロボロ。悪いことづくめの布団で今までよく寝れていたものだと、心の中で自分をほめた。

「働くのもいいものでしょ？」

ふふ、とル力が笑う。シウは少しだけ間を空けて、まあな、と答えた。

しかしすぐにかぶりを振ると、その答えを撤回した。

「いや、やっぱりダメだ。あんなクソ真面目に働くなってもう嫌だ」

「でも盗賊なんてやってたら、またいつ捕まるか分かんないよ」

「いいんだ。手っ取り早く、沢山の金を稼ぐ為には——生きる為には、仕方ない。ま、《コトダマ》さえ見つけければ、そんな生活ともオサラバだからな」

ルカの言葉を一蹴して、シウは乾いた笑い声を上げる。ルカは、そんなシウをただ悲しげな瞳で見つめていた。

やがてシウは目を閉じ、寝息をたて始めた。よほど疲れていたのだろう、靴も履いたままだ。

「生きる為仕方ない、か」

頭の中で反芻させていた言葉を、ルカはぼそりと呟いた。

それは青年の世界——この戦乱で疲れ果てた世界の下層で生きる若者が発した、真実だった。

ルカはシウに布団をかけ、俯いた。

「……僕は——」

くるりと踵を返す。

後続くはずだった言葉を飲み込み、ルカは部屋を出た。

小さな足音だけが、辺りに響いていた。

## 追憶・其は誰が為の夢を見る

\*\*\*

「私は……一体何を成せたのか」

彼は、呟いた。

誰が聞くでもない、独り言だった。

「私は、何を成せたのか」

もう一度、繰り返す。

答えなど分かり切っていた。けれど、彼は分からないふりをして  
いた。

「私は――」

何度自問しても、答えは決まっているのに。それでも彼は自分  
身に問い続けた。

広く、威厳に満ちたその場所は、多くの者達で満ちている。しか  
し、それにもかかわらず、彼は独りだった。

彼を敬う者、愛する者、利用しようとする者。数々の想いと思惑  
の入り乱れたその場所で、安息など得られるはずもなかったのだ。  
今にも逃げ出したい思いに駆られながらも、彼はそこにいた。

「シウレスカ様」

目の前で跪く男が、彼の名を呼んだ。彼はそれを受け立ち上がる。誰もが跪き整然とするその場所で、彼は誰よりも高い位置からその光景を見下ろし、声を張り上げた。

「臣民達よ」

——逃げるわけにはいかないのだ。  
たとえいくつもの軀の山を築いたとしても、白金の玉座が崩れ落ちても。

私は——

\*\*\*

## 9・宿にて(1)

「おわっ……？」

うつ伏せたままいつのまにか眠りこけていたシウは、涎が垂れそうになって目を覚ました。

口元を拭い、もそりと起き上がる。頭はまだ完全には覚醒していないようで、なぜそんな状況なのか掴めない。しばらくその場に立ち尽くした後、一日中の労働で、疲れ果て寝てしまったことを思い出した。

「……ル力？」

ふと、辺りを見渡して、少年の姿がないことに気付く。しかし、呼んでみても返事はなく、部屋は自分以外もぬけのからだった。

「どこ行っただ？」

さして気に留めることもなく、シウは部屋のドアを開けた。その瞬間、鼻が夕食の香りを察知した。

「メシだ！」

飛び跳ねるようにして階下に向かう。食堂と書かれたプレートの下がった大部屋に入ると、そこにはすでに見慣れた少年の顔があった。その口は、もぐもぐと動いている。

勢いよく現れたシウを見て、ル力は一瞬驚いたが、すぐに満面の笑みを浮かべた。

「あ、シウ。おはよう」

すでに三分の一ほど料理をたいらげたルカの向かいに、シウは乱暴に腰掛けた。

「おはよう、じゃねえよテメエ。ぬけがけしやがって!」

シウは睨みをきかせながら、手前の料理を取った。

「何だコリヤ! うめええ!」

一口パクリと口に含んだ途端、シウは絶叫にも似た声を上げた。バターでソテーにした白身魚には、濃厚でありながら口当たりのよいソースがかかっている。しかし悲しいかな、彼はその味を他に表現できる語彙を、持ち合わせていなかった。

「おや、やっとお目覚めかい?」

厨房から布巾を持って現れたのは、二人を迎え入れた女将だ。シウはもぐもぐと口を動かしたまま、彼女を見やった。

「あんまり気持ち良さそうに眠ってるから、その子の分だけ先に用意したんだよ。まだあるから、落ち着きなよ」

女将は必死になって食べ物を確保しようとするシウを見て、大声で笑った。

「待ってな。今、用意するから」

女将は手際よく料理をテーブルに並べていった。

小さな宿だけに、利用客は彼らだけであつたにもかかわらず、シウは一人で何人分もの料理をたிரらげていく。うまいうまいと言いつながら、どんどん料理を口に運ぶ彼を見ながら、女将は満足げにしていた。

「うまかつた！ ごつそさん！」

シウは両手をパンと合わせ一礼すると、満たされた腹をさすつた。その表情は幸せそうだ。

「よく食べたね……」

そんなシウを横目に、ル力は弱々しく言った。どうやら少年も食べ過ぎたようだった。

「あはは！ いい食べっぷりだったね。私も作つたかいがあるつてもんだよ」

女将は空いた皿をさげながら笑つた。

「うまかつたぜ、おばちゃん！ 特に魚、魚がうまかつた」

そうだと、女将は得意げに答える。さげた皿を流し台まで運ぶと、二人の元まで戻ってきた。

「この港はいろんな魚が入ってくるんだ。中央大陸だからこその特権さね」

へえ、と頬杖をつきながらシウは返事をする。女将は別のテーブルから椅子を引き寄せ腰かけると、そんな彼の顔をまじまじと眺めた。

「な、なんだよ」

見られていることに気付いたシウが顔をさする。何か付いているのかとも思ったが、そうでもないようだ。

「ああ、何でもないんだ。気にしないでくれ」

そういう女将の視線は、ずっとシウに向けられている。何かを探るように、じつと青色の瞳を見据え、逸らさない。

ル力はそんな二人の様子を、ただ見ていた。女将はシウを見て何かを思い出そうとしているようにも見えた。

しかし、やがて根負けしてしまったシウがふいと顔を逸らした。女将もさすがにそれを追うようなことはせずに、ただ首を傾げていた。時折唸り声を漏らす。

「だから何だよ、おばちゃん」

シウは顔を背けたまま、声を荒げた。過剰に凝視されて怒っている、というよりは照れているようだ。

「ああ、ごめんごめん。いやあ、あんた誰かに似てるような気がするんだよねえ。……それとも、今まであたしと会ったことあるかい？」

「はあ？　ねえよ！　俺ここに来んの初めてだぜ。おばちゃんの勘

違いじゃねえの」

そうだよねえ、と女将が同意する。しかし再び唸り始めたところを見ると、完全には納得しきれてはいないようだった。

シウは立ち上がり、踵を返す。

「とりあえず、ごちそうさん。明日の朝メシも期待してっから」

ぶつきらばうにそう言い残して、食堂を後にする。はいよ、と返事をしながら女将はシウの後ろ姿に手を振った。ボタンとドアが音をたてて閉められてから、女将はルカと顔を見合わせた。

「ありゃ、気を悪くさせちゃったかね」

肩をすくめ、苦笑して見せると、ルカは首を横に振った。

「ううん、照れてるだけ。寝ればコロッと忘れちゃうから大丈夫だよ。……シウは単純だからね」

「はは、そうかい」

女将は笑いながら立ち上がった。それと同時にルカも立ち上がると、布巾でテーブルを拭き始めた女将に向け、笑みを浮かべた。

「うん、だから平気だよ。……カティナ」

その言葉にはっとして、女将の手の動きが止まる。

彼女は、シウはもちろん、この少年にも会ったのは初めてだ。それなのに今、この少年ははつきりと口にした。

「あんた……、どうしてあたしの名前を知っているんだい。しかも、あたしの——」

そう言いかけて振り返り、言葉を失う。そこにはすでに少年の姿はなかった。

布巾を手にしたまま、女将はただ呆然と立ち尽くしていた。

「あたしの旧姓なんか、どうして……」

誰もいなくなった食堂で、ぽつりと呟く。

カティナ——それは自分の旧姓に他ならない。もともと生まれ育った土地を離れ嫁ぎ、姓が変わり早二十年。あんな幼い子供が知るはずないのだ。

しかし、いくら考えあぐねても、その答えが出ることはなかった。

10・宿にて(2)

「はあー、食ったなあ」

ベッドの上で大の字に寝そべりながら、大きく息を吐いた。  
少し遅れて部屋にやってきたル力は、シウのそんな姿を見て苦笑する。

「もう寝るの？　ねえ、これからの計画立てなきゃ」

「んあ？」

間拔けな声で返事をし、首だけをル力に向ける。ル力はシウに近づき手を差し出した。

「地図ちょうだい」

「ほらよ」

シウは懐を探り、差し出された手に素直に地図を乗せた。彼にとって、理解できない地図など、ただの紙切れに過ぎない。そんな紙切れなどどうでもよかった。

渡された地図を地べたに広げ、うーんとル力が唸る。何事かとは思うが、シウはそれをル力に問いたりしなかった。聞いても分からない、そう思ったのだ。

「船でリキヨウまで行って……、それから……」

ぶつぶつと呟きながら、ルカの小さな手が紙面を動き回る。

そんな中、横目でその様子を見ていたシウの目に、一際大きな都市を小さな手が素通りしていくのが見えた。

「……そこ、寄らないのか？」

思わず口をついて出た言葉に、ルカが目を丸くして顔を上げた。

「……そこって？」

「だから、そこだよ。今通り過ぎただろ？　そこ、けっこうでけえ町なんじゃねえの？」

シウは、寝転がったまま地図を指差した。

ルカが指を走らせていたのは、地図でいうなら、中央大陸の右側に位置する大陸。中央大陸北端カルカンドの緯度は、だいたい右の大陸の真ん中にあたる。そこに位置する町に寄港する便に乗り、ルカの言う『世界の果て』を目指すのであれば、皇都アカツキを通るルートが妥当であるのだ。

ろくに地図も読めないくせに、ルカの手が都を素通りするのを、シウは目ざとく見つけ指摘した。

「そこ寄ったほうが、いいんじゃないの？」

予想だにしていなかった指摘に、ルカの顔が曇った。

「……皇都は今、ちょっと危険なんだ」

「コウト？ なんじゃそりゃ。その町の名前か？」

シウはもそりとベッドから這い出し、ルカに並んで地図を見つめた。

ルカは大きく息を吐いて、天井を仰ぐ。カイランから出たことなかったこの青年に、うまく説明出来るか不安だった。

「……うーん、なんて言うのかな。この東大陸には大陸全土を納めている王様がいるんだけど……」

中央大陸と東大陸では、そもその制度が違う。

中央大陸では、カイランやカルカンドといった比較的發展している町には領主がいる。それを中心に、いくつかの他の小さな町や村をあわせた地域は州と呼ばれ、領主達はその州を治めているのだ。それに対して、東大陸には王政がひかれていた。皇都アカツキには、東大陸全土を納める皇王の居住である城が構えられているのだ。

「……アカツキは今大変だから。先王が崩御してバタバタしてるんだ」

「センオウ？ ホウギョ？」

シウが顔を曇らせる。しかしそれは内容を理解したからではなく、意味が分からないがための表情であることを、ルカは分かっていた。大きく息を吐きながら、もう一度天井を仰ぐ。この青年に東大陸の在りようを説明するのは、どうやら困難を極めるようだ。

「ついひと月くらい前に、王様が死んじゃったんだ。それで跡継ぎだなんだって揉めててピリピリしてるっていう噂があるんだよ。変

な揉め事に巻き込まれたくないでしょ？」

へえー、と恐らくは理解していないだろう間の抜けた声を、シウは返した。

とりあえずアカツキには寄らないよ、とひとこと言い放つと、ルカは地図を丁寧に折りたたみ、立ち上がった。説明しても仕方のないことは、さつさと終わらせるにかぎる。そう思ったのだ。

しかし、シウはさらに疑問を口にした。

「でもよ、俺達がその揉め事に巻き込まれるなんてないだろう？ だって関係ねーじゃん」

あっけらかんと言いつつ。

そんな様子を見て、ルカは明らかに動揺していた。そのことにシウも気付いた。

「……なんか都合悪いことでもあんのか？」

「うっん、そんなんじゃないよ。ないんだけど……」

「じゃ、いいだろ」

実際のところ、シウにとっては皇都アカツキを通るのがベストなのだ。理由など決まっている。ただ、行ってみただけだ。

ルカは黙り込んだ。

シウにこれ以上説明するなど無理だ。しかし、このままその希望を受け入れるわけにもいかない。とりあえず分かっているのは、このまま話し続けても、堂々巡りになるということだ。

「……分かったよ、シウ」

仕方なく、ル力は大きく息を吐きながらそう言った。その瞬間シウはあからさまに嬉しそうな顔をする。満面の笑みを浮かべ、ガッツポーズをとるそんな姿を見てル力は苦笑しながら続けた。

「でも、ひとつだけ約束して。物珍しいからって、絶対一人で突っ走らないで」

ガキ扱いすんなよ、とシウが返す。言葉はぶっきらぼうながらも、そのトーンは明るい。

しかし、その言葉には何の説得力もないことを、ル力は知っている。何しろ、ダヤでの一件——前科があるのだから。

「よし、進路も決まったことだし寝よーぜ」

ル力の不安をよそに、シウは大あくびをしながらベッドに飛び乗ると、そのまますぐに寝息をたて始めた。

「……ついさっき寝てたばかりなのに」

すやすやと寝息をたてる青年を見下ろしながら、ル力は苦笑した。

## 11・いざ東大陸へ

「おい……、ルカ……」

息も絶え絶えに、シウは声を何とか発した。座り込み俯くその青年の顔色は酷く青い。

「とてつもなく、具合が、悪いぞ……」

そんな姿を見下ろしながら、ルカは苦笑した。

「船酔いだよ。風に当たってれば良くなるって」

「あー、気持ち悪い……。リキョウにはいつ着くんだ……」

「まだ出発したばかりだよ、シウ」

天気は快晴、波も穏やかな昼下がり。二人は、港町カルカンドから東大陸の玄関口リキョウに向かう船上にいた。ルカにとっては快適な船旅であったが、シウは乗船してわずか五分ほどで音を上げていた。

いい加減、そんなシウの様子を見守るのにも飽きて、ルカはデッキから外を眺めた。

透き通る青い海に、澄み渡る青い空。そして視界の片隅には船酔いに呻く青年の姿。

それだけを見れば、何て平穏な日だと思う。それと同時に、これから向かう場所を想像し、気が重くなる。

仕方がなかったにしろ、やはりアカツキに向かうのは躊躇われる。またいらぬ騒動に巻き込まれるに決まっているからだ。——シウを連れて行きたくはなかった。ただそれだけが悔やまれた。

「おいおい大丈夫か？ 何てえザマだ」

がはは、と品があるとは到底言えない笑い声を受けて、ル力は振り返った。そこにいたのはよく日に焼けた体格のいい男だった。確か船長だったはずだ、とル力は記憶している。

無精ひげを生やし、黒いドレッドヘアーのその男は、文字通り豪快にシウの背中を叩いた。本人はさすっているつもりなのかもしれない。シウは何やら呻いていたが、それが船酔いによるものなのか、それとも船長に背を叩かれたからなのか、悩むところだった。

「リキョウまでは長えぞ。まだ半日はかかる」

シウがゆつくりと顔を上げ、青ざめた顔で口をわなわなと動かした。額には冷や汗が浮かんでいる。

「ば、馬鹿言ってんじゃねえぞ……、半日も乗ってられる、か……」

言葉自体は力強いが、いつもの勢いはなく、息も絶え絶えにシウは呟いた。それっきりまた俯き、顔を上げることはなかった。そんなシウの横でル力は苦笑した。

「まあまあ、暫くの辛抱だよ、シウ。アカツキに行きたいんだっただら我慢しなくちゃ」

アカツキに寄る寄らないに関わらず、世界の最果てを目指すのであれば、航路ははずせないのだが、励ますつもりでル力が言う。しかし、シウにはたいした効果にはならなかったようだ。かすかに聞き取れるくらい小さな声で、おう、と俯いたまま応え、再び押し黙ってしまった。

「はっはっはっ、とりあえず休んでな。船室のベッドで眠っても気が紛れるぞ」

船長が豪快に笑い、背後の船室のドアをあごで指す。気が紛れる、の言葉にびくりと反応し、シウはふらりと立ち上がると、そのままよろよろと船室へと向かっていった。後にはル力と船長が残された。

「おい、ボウズ！ おめえの兄ちゃんは頼りねえな。そんなんで東大陸に渡って大丈夫なのか」

ふう、と大きく息を吐いて船長はル力を見下ろした。口調はぶっきらぼうだが、心配しているような声色だ。

「アカツキは今きなくせえ噂がつきないんだがな。おかげさんで商売あがったりだ」

「きな臭い？」

ル力が問い返したことで、船長は再び大口を開けて笑った。

「皇帝が死んでもうひと月経つが、後継ぎが決まんねえんだとよ。なにやら隠し子がいるとかいないとかでな、揉めてるって噂だ。いつでもボウズには意味が分からねえか」

がははと笑いながらルカの頭を撫で、船長は踵を返した。その力強さにしばらく頭を揺さぶられる感覚を残しながら、ルカは船長の背を見送った。大きく息を吐く。

「……やっぱり、まだ——」

小さく呟く。その声は潮騒に溶け込んでいった。

## 12・港の喧騒の中で

「ここがリキョウか、でけえな……テイトはもつとでけえのかな！？」

船室で休んだことによって幾分調子を取り戻したのか、久方ぶりに地に足を付けたシウは感嘆の声を漏らした。

目を丸くしながら、まるで少年のようににはしゃぐ彼を横目に、ルカは嘆息する。

「シウ……、約束覚えてるよね？ 騒ぎとか起こさないでよ！」

小声で、しかしはつきりとした口調で言う。シウは聞いているのかいないのか、きよろきよると辺りを見渡しながら目を輝かせている。

仕方がないとは思いつつ、ルカはシウの手を取り、歩き出した。船着き場から進む先には巨大な市場がある。声を張り上げて客を呼び込む男もいれば、店先で魚を焼き香ばしい匂いを漂わせている女もいた。シウ達はそれらを後ろ髪を引かれる思いで通り過ぎて行った。

「ここが東大陸最大の玄関口、リキョウだよ。北と南の海流がちようどぶつかるここでは海産物が豊富に採れるんだ。なかでもやつぱりここで一番有名なのは、ミレー貝かな。肉厚でこの時期特に甘味を感じるミレー貝の刺身は皇族の口にも入るんだよ」

「ミ、ミレー貝……」

涎が出そうになった口の端を拭い、シウはルカについていく。どんなにうまい貝なのか想像するだけで、腹が減ってくるのを感じた。そういえば船室で出された食事にもあまりの気分の悪さで手をつけていなかったことを思い出した。

「あゝ、腹減ったなあ」

「シウは腹減った腹減ったばかりだね」

苦笑するルカにシウはあからさまに肩を落として見せた。しかし少年は首を横に振った。

「駄目だよ。お金だってないし。また靴磨きでもする？」

ルカの提案にさらにシウは深くうなだれる。その案だけは却下だ。

「それだけはゴメンだな。あんな金にもならねえ仕事、やってられつか。あー、もっと手っ取り早く稼げたらな——」

そこまで言って立ち止まるシウ。その手をとっていたルカも強制的に立ち止まった。

どうしたの、と見上げる少年の目に映ったのは、不敵に笑う青年。人差し指を唇にあて、ルカの手を振りほどくと人混みへと突き進んでいく。ちよつと待ってる、と笑みを浮かべた口が動いたかと思つたら、その姿は雑踏に消えた。

やがて姿を現したシウの手には三個の布袋が握られていた。ルカにはすぐにそれがシウが人々の懐からすってきたものだと分かった。

「へっ、ちよろいもんだな。もつと周りを気にして歩けっつーの」

得意げな表情で、な、とルカに同意を求める。もちろんその通りだといった答えが返ってくると思っていたのだ。しかし少年からはすでに笑みが消えていた。シウは気にせず布袋を開ける。中から出てきたのは数枚の銅貨と銀貨だ。だが三袋の中身はいずれも予想より少なかった。

「なんだよ、しけてんな。カイランの奴らと変わんねえじゃねえか」

ちっ、と舌打ちをして手の平に載せた硬貨を数える。

勘定に夢中になっていたシウだったが、服の裾を引かれていることに気付き視線を下ろした。そこには金色の瞳で睨みつけるルカがいた。

「シウ。何してんの」

その子供らしからぬ形相に一瞬たじろぎながらも、シウはすぐにヘラヘラとした笑みを浮かべた。

「こつしたほうが手っ取り早いだろ？ 働くなんてアホくせえことするよりも」

「だめだよ」

ぴしゃりと言い放つ。同時にシウの手から硬貨を奪い取った。

「な、何すんだテメエ」

一瞬の出来事に呆気にとられかけたシウが叫ぶ。その声に周囲が

ら視線が注がれた。

今度はルカが呆れたように唇に指を当てた。騒ぎを起こすなという約束を思い出して青年は慌てて口をつぐむ。そして今度はごく小さい声でルカに抗議する。もちろん凄むことも忘れない。

「それは俺のもんだ。とつとと返せ」

「……違うでしょ、シウ。これはシウが盗んできた誰かのものだよ。誰かが一生懸命働いて稼いだお金だよ」

シウの言葉に怯むことなく、ルカが返す。さらに一歩踏み出して続ける。

「これは元の持ち主に返すよ。これはきちんと働いて得た人に相応しいお金なんだから」

「返すったってもういねーよ。とつくにどっか行っちゃったって。だから、ほら、俺達が使ってやったほうが有意義だろ」

「すぐに見つかるよ。……僕が言うんだから、間違いない——ほら」

ルカが指さした先に初老の男がいた。男は地面をきよるきよると見渡しながらこちらに近付いて来る。狼狽しあわてふためく様は、何かを探しているかのように見えた。そして顔を上げた瞬間、シウと目が合った。すぐにその視線が少しだけ下がる。青年の持つ布袋に目をやったのだ。

「——あ、その方！ それは、もしかして」

シウは慌てて布袋を隠そうとしたがすでに遅く、男は猛スピード

で彼等の元へ駆け寄ってきた。

「それ、その茶の財布、拾って下さったんですか！ それ、私のものです！」

「は、はあ……」

それは間違いなくシウがすすてきた布袋の持ち主の一人だった。思わず心の中でため息をつく。

「これ、落ちてたよ。はい、おじさん」

ルカは肩を落とすシウから布袋と硬貨を強引に手放させると、男に手渡した。男は安堵の表情を浮かべ大きく息を吐いた。

「ああ、助かった。これがないと明日食うものにも困るんだ。ああ、本当によかった！」

男は何度も礼を言い、帰り様にも何度も振り返り頭を下げた。

不思議なことに、ルカの言う通りその後立て続けに残り二つの布袋の持ち主も現れた。こうしてシウの手元に金が残ることはなかった。

「何でだよ……、こっちの奴らは鈍いくせに鼻が利くのか……」

がつくりと肩を落とすシウが呻いた。そんなシウに、ルカが手を差し延べる。

「真面目に働けてことだよ。みんなそうやって生きてるんだ」

「真面目に働いたって——意味ない」

がしがしと頭を掻きむしりながらぼつりと呟く。その言葉を少年は聞き逃さなかった。しかし返そうとした言葉は青年の表情を見た途端、引っ込んでしまった。

目の前の青年が浮かべた表情——それは苦悶のものにはかならなかった。財布をすれなかったことに悔しがっているわけではないということが、シウの顔に滲み出ている。

「シウ？」

「意味ねえんだよ、真面目に働いたって。たかが知れてる、みんな足元を見やがるんだ。そうして貧しくて死んでいったって、誰も何も思わねえ。誰も」

「シウ……」

「誰も……助けちゃくれねえんだ」

大きく嘆息し、シウはぽつりぽつりと話し始めた。

### 13・生きるための罪

「シウ、刺繍は売れたかしら……？」

薄い布団から枯れ枝のような手が伸びる。立て付けの悪い引き戸を閉めてから、シウと呼ばれた少年はその手に持っていた巾着袋を背に隠した。その代わりに懷をまさぐり、小さな布袋を取り出した。

「売れた売れた、全部売れたよ！ 見て母さん、これが今日の稼ぎさ」

そう言っただけで布袋を振って見せる。じゃらじゃらと硬貨の擦れ合う音がした。

「ああ……よかったわ、これでこの子のミルクを買える……」

シウは布団から起き上がろうとする母親の背を支えた。骨張りが細いその体は少年の力でも、いとも簡単に起き上がらせることが出来た。ふとその隣に目をやる。そこにはすやすやと寝息を立てる女の赤子がいる。

「レレイ、泣き止んだんだね」

「なんとかね。でもきつとすぐに目を覚ますわ。満足にミルクを与えることも出来ないんだもの」

長い間泣いていたからなのか、赤子の産毛のような髪は額に汗で張り付いている。そんな娘を母親は慈しむように撫でた。

「シウ、お前もごめんね。私がこんな体ばかりに……」

言いかけて母親は激しく咳込むと、シウは慌ててその背をさすった。

「ああ、母さん……無理しないで。横になっててよ、俺ミルクを買ってくる」

母親の咳が治まるのを待ってから、シウは立ち上がった。悪いね、と母親のか細い声を背に受け、彼は家を飛び出した。

幼いながらも少年には、母の病の状態が芳しくないことが分かっていて。そしてその病はいずれ死に至るであろうことも。だからこそ少年は奔走していた。病の母親を救う為、そしてまだ幼い妹を守る為。

それでも少年にも限界があつた。貧しく貧相な身なり、そして子供であるがゆえに、母親が文字通り命を削りながら作る刺繍には足を見た値段をつけられ、それを拒むと足蹴にされた。

仕方がないのだと自分に言い聞かせながら、罪を犯すようになってのは遅くはない。

貧民街とは違い市場には裕福な者達で溢れている。そんな場所でシウのような少年はかなり異質な存在と言えた。

少年は歩きながらめばしい人間を探す。そして向こうから近付いてくる中年二人組を見つけた。昼間から酒に酔っているのか顔は赤く、声はこの通りの中であつても際立っている。

シウは彼等とすれ違うその瞬間、男の懷に器用に手を伸ばす。それは、簡単に抜き取ることが出来た。

「ふん、馬鹿なやつ……」

すぐに小道に入り、それを確かめる。布袋にはある程度の重さがあつた。

それを握り締めながら、シウはいきを吐いた。いい気なものだと思つ。自分達は今日食べるものにさえ困つているというのに、あの男達は昼間から酒を飲んでいるというのだから。

布袋をしまい通りに出る。まずは妹のミルクを買わなくてはいけない。

「ふざけんな！」

訪れた店でシウは声を張り上げた。その目の前には香油で薄い髪を頭に張り付けた男がいる。その店の主だ。男は、やれやれといった表情で息を吐いた。

「そこにあるだろ！ 早くよこせよ！」

目的のものが店主の後ろにある棚に陳列されていることはシウには分かつていた。しかし男はかぶりを振る。

「だから何度も言うがな。この店にはお前に売るようなものはない。さっさと出て行ってもらおうか」

「金なら持つてるんだ！　なんで売れないなんて言うんだよ！」

怒りのあまり掴みかかるシウ。男は情けない悲鳴を上げ店の外へ逃げ出すと、大声を張り上げた。

「た、助けてくれえっ！　こいつは強盗だ！　店が襲われているんだ！」

店主の悲痛な声に周囲に次々と人が集まり始めた。そのことにシウが気付いた時には、既に警備隊に取り囲まれていた。

屈強な二人の警備隊がシウの腕をぐいと掴む。少年は強引に店主から引き離された。

「な、にすんだよ……俺はただミルクを売ってもらおうと……」

「ち、違うつ、そいつは強盗だ！　さっさとしょっぱいてやって下さい！」

慌てて弁解しようとするシウの言葉を遮るように店主は叫んだ。警備隊は元からシウの声など聞こえていないかのように懐から取り出した縄で少年の両手首を縛り始める。いよいよ身の危険を覚えて少年は警備隊に向き直った。

「俺は強盗じゃない！　あのバカ親父が商品を売ろうとしないんだ、金ならあるのに！」

訴えるシウに向かって警備隊の陰から店主は叫ぶ。

「どうせその金だつて盗んだんだろう。これだから嫌なんだ、貧民街なんて焼き払ってしまえばいいのに！」

「なんだと！」

それはシウにとって火に油を注ぐような言葉だった。しかし両手を縛られた状態では何が出来るわけでもなく、ただ鼻息を荒くした。そんな少年を嘲笑うように店主は陰に隠れたまま薄笑いを浮かべる。

「よろしく願いますよ、警備隊の皆さん。こいつらは害悪以外の何者でもない。とりあえずこんなガキの腕はとっと切ってやって下さい」

その言葉に思わず息を飲む。

盗賊への制裁は腕の切断。それくらい少年だつて知っている。しかし自分は物を買いにこの店に来ているのだ。金だつて持っている——それが盗んだものだということは否めないのだが、今のところはいい。この拘束、そして店主の要求はその状況に対しては不当なものだと言えた。

しかしこのままでは要求通りになってしまうのではないかと少年の背には冷や汗が流れる。

「離せよ！ 離せつて、俺は違うんだ！」

少年の悲痛な叫びが辺りに響く。腕を押さえ付けられたまま、シウは周囲を見回した。警備隊をはじめそこにいる誰にも、彼の言葉は届いていないようだった。その証拠にそこに集まる見なりのいい人間達はそろって眉をひそめ、白い目をしていたからだ。

「さあ、来い」

ぐいと腕を引かれシウは顔を歪めた。しかし警備隊はそんなことなどおかまいなしに力を込める。

「やめろよ！ ミルクを買っていかないと駄目なんだ。妹が……レイが……っ」

少年の悲痛な声が響いた。その時だった。

「おやめ下さい！」

人影がシウと警備隊の前に飛び出した。跪き両手を合わせ懇願するのは、少年の母親だ。

「どうか、どうかおやめ下さいませ！ 私はこの子の母でございませ。この子がそんなことをするなんて……きつと何かの間違いです。どうか、どうかこの通りです。」

目の前で地面に擦りつけるように頭を下げる母親。そんな姿を見てシウは顔が熱くなった。

「おやめ下さい、お願いします」

母親の青白い頬には髪の毛が張り付いている。恐らく走ってきたのだろう、細い肩は上下していた。

シウはそんな母の姿を見て悲しくなった。そんなことをさせてしまっている自分に対しても情けなく思う。

しかし、やがて親子らを取り巻く空気が変わっていくことに気付く。必死の形相で食い下がろうとする母親の姿を不敏に思うような

声までも漏れ聞こえてきた。店主の顔色も変わっていた。

「お願いします！」

なおも頭を下げつつける母親を直視することが出来ず、シウは目を背けた。ついには店主が警備隊に渋々シウの手を放すように言った時も、警備隊がその場を去った後も言葉を発することが出来なかった。

やがて親子の周囲からは、何事もなかったかのように人々は去っていった。

「……シウ」

夕日を背に前を歩く母親が少年の名前を呼ぶ。少年は応えない。

「シウ」

再度響く母の声。それは稟として高く澄んでいた。くるりと後ろを歩く少年に向き直り、微笑む。

「お前は優しい子よ。私やレイを守ろうとしてくれる立派な男の子」

シウは顔を上げた。逆光で暗くなった母の顔を窺い見る。笑みを浮かべ自分をまっすぐに見つめる母は懷から布袋を取り出した。少年はすぐにそれが何であるかに気付いたが、それと同時に母から目

を逸らす。それは少年が盗んだ財布だった。

「でも、盗みはいけないわ。いくら理由が尊いものであったとしても、その瞬間それはくすんでしまう」

「……」

俯き押し黙る。顔を上げることが出来なかった。

そんな少年を母親は抱き寄せた。

「お前は私の誇りよ。愛しい大切な私の息子。だからどうかお願い……自分を貶めるようなことはやめてちょうだい、シウ」

少年の体を抱きしめる細い腕に力が込められる。細い腕は震えていた。

「それからどうなったか分かるか？」

海の見える広場の地べたに座り込みながら、大きく息を吐きシウは自嘲気味な笑みを浮かべた。見下ろす形で相対するルカは何も応えられない。目の前の青年の愁いに満ちた表情には、幸せな結末など微塵も見えなかったからだ。

「……俺はな、盗みを止めたんだ。母さんのあんな顔見たくなかつ

たから、真面目に、それこそ朝から晩まで刺繍を売り歩いた。いくらなじられようが、雨の日も、雪の日も、大風の日だって」

でもな、とシウは続ける。その瞳はどこか遠くを見つめていた。

「ろくに売れない刺繍を作り続けて母親は死んだ。妹もそれから数年足らずで流行り病で死んだんだ。金が無くて、治療院に診せることも出来なかった」

「シウ……」

「レイは、妹はまだ四つだった。…… たった四つ——四年ぼっちらか生きられなかったんだ。俺は何をしても守ってやらなきゃいけないかった。真面目に、とか自分を貶める、とかそんなじゃなく」

何をしてでも——そう絞り出すように発した言葉は、いつの間にか夕日に染まった空に溶けていく。そのままシウはがっくりと肩を落とした。

「盗んで何が悪い。明日食うものにも困る？ 一食くらい抜いたって人間は死なねえんだ。どれぐらい食わずにいれば死ぬか、教えてやるつか？」

「シウ、僕は……っ」

ルカが首を振る。

シウは顔を上げないまま、笑った。それはひどく歪な笑みだった。

## 14・あの日の誓い

「……」  
「……」

リキヨウの町外れに位置する小さな宿、その中でも一等安い部屋に、シウとルカの二人はいた。互いに背中合わせに座り込み、二つの寝台と小さなテーブルだけが置かれた質素な部屋で、シウとルカの二人は沈黙を守っていた。

この部屋の手配はルカがしたものだった。どのようにしてこの部屋を借りてきたのかシウは知らない。しかしそのことですら彼にとってはどうでもいいことだった。

すぐ下の階は食堂になっている。窓を開け放しているせいか、部屋には食欲を誘ういい香りが漂っていた。それでもシウは口を開くどころかいつこうに動きだす気配を見せない。いい加減耐え兼ねて言葉を発したのはルカだった。

「ねえ、シウ。お腹空かない？ 何か食べに行こうよ」

「……」

しかしシウはそんなルカを一瞥するとすぐに視線を逸らしてしまった。

怒っているようには見えない。しかし、その表情はいつものシウのものではないように思えた。食事の匂いにも微動だにしないのがそれを表している。

「じゃあ僕、ここに持つてくるよ。何か食べたいものがあつたら言

つてよ」

「……」

結局、ルカは何の言葉も発さないシウを後にして食堂へと向かった。

ぐうと腹の虫がなるのをおかまいなしに、シウはベッドの上にごろりと横になった。

「……なんで俺があんなガキに説教されなきゃなんねーんだよ……」

ぼつりと、ふて腐れるように呟く。脳裏に蘇るのは、今日の港での出来事。盗みは良くないと説く、自分よりずっと幼いルカの言葉だ。

「そんなの……分かってるつーの。でも、それでも、そうしなきゃ生きてこれなかったんだ。そうしていれば、レイは助かっていたかもしれないんだ」

決して重い病だったわけではない。それでも命を落としてしまったのは、満足な食事を与えられなかったからだ。やせ細り、やがて水さえも受け付けなくなった妹は、恨み言ひとつ言うことなく死んだ。シウは、その瞬間の光景を今でも心に留めている。忘れること

など出来なかった。

だから誓ったのだ。

「……《コトダマ》さえ、《コトダマ》さえ手に入れば——」

世界の最果てに送り届ければ、《コトダマ》の在り処を教えると言ったルカ。そしてその場所はこの大陸にあるのだ。

「レレイ……、お前を生き返らせてやるからな」

あと少しなんだ。

シウは枕に顔を沈ませ、呟いた。

## 15・それぞれの企み

「イサラ様！ イサラ様！」

代々の皇王の肖像画と、青磁や絵画が並ぶ長い廊下を渡り、カリンは足早に主の部屋へと向かっていた。イサラの私室は本人の希望もあって最上階の角にある。北側に位置する為、日当たりは良いとは言えないが、普段は静寂に包まれているその場所を、イサラは好んでいた。

「……どうかしたのですか？」

扉に手をかける前に姿を現したのは、既に夜着に身を包んでいるイサラだ。長い黒髪をかきあげながら、夜更けに訪れた従者に視線を落とす。

「夜分申し訳ありません、イサラ様。不穏な噂を耳にしまして、急ぎ伝えねばと思いやつてきた次第でございます」

「かまいませんよ、入りなさい」

身を翻し室内へと足を向けるイサラに、カリンは慌ててかぶりを振った。

「いえ、私はここで……！」

「気にすることなどありませんよ。こんな時間まであなたも大変ですね」

そう言ってイサラは室内から手招きをする。私室に、しかも夜分に足を踏み入れるなど言語道断ではあったが、その部屋の主がそうしろというのであれば、とカリンもまた室内へと歩を進めた。

主の私室は酷く殺風景だった。廊下や他の部屋には数え切れないほどにあった青磁や絵画などの類は一切なく、棚に飾られているのは二枚の写真のみ。唯一部屋を彩っているのは先日中央大陸の村で手に入れた花羅織りの絨毯だ。

「かけなさい、と言ってもあなたは聞かないのでしょうね、カリン」

皮張りのソファに腰掛けたイサラが微笑んだ。その端正な顔立ちが五年前に亡くなったラナーヤ第一王妃と瓜二つだとカリンは思っている。皇都アカツキー美しいと言われていたラナーヤ王妃は、王族に仕えるカリンの憧れでもあった。

「元老に動きがありました。ユージンがリキョウに向かった、と」

「こんな夜更けにですか？ 戴冠の儀まで日もなくなり焦っているようです。老人達め……大人しくしていればいいものを」

イサラの深い青色の瞳が揺らめく。足を組み直し、大きく息を吐くその表情は艶めかしく、カリンは思わず見とれてしまいそうになるのを、あわてて振り払った。

「今更傀儡を探し当てたところで、私は屈しない。元老の好きにはさせませんよ」

ふふ、と笑う。

そんな主の笑みは余裕が満ち満ちているように見える。

先代の皇王であるシウレス力が亡くなり早ひと月。次期皇位継承権を持つのは第一王妃の子息であるイサラだが、この期を逃すまいと動き出した元老が、五年前に既に亡くなっていた第二王妃の元の子が生きていると騒ぎ出した。二十前に死産とされていた筈の子がもし生きているとするならば、第二王妃の子ではあるがイサラより早く生まれたその子こそが正当な皇位継承権を持つのだと。

居城にいてもしない人間を主にしようなど、とんだお笑い草だ。しかし元老の狙いがそこにあることはカリンもイサラも分かっていた。何も分からない人間を皇王に祭り上げ、老人達は彼を傀儡としていように操るのだ。賢王として長くこの地を治めてきたシウレス力が、もしそのような愚かなことを企てる元老のことを知れば、酷く悲しんでいたことだろう。

「カリン、ひとつ頼まれてもらえますか？」

まっすぐ従者の瞳を見据えるイサラ。カリンは断る筈もなく頷いた。

「勿論です。我が主」

16・不穏な夜(1)

「……………腹減ったあ……………」

結局夕食を食い損ねたシウは、ぐうぐうと鳴り止まない腹を抱えながら呟いた。すぐ下の階の食堂の騒がしさはとうに消え、宿の利用者はすでに寝静まつている時間帯だ。もちろん、テーブルを挟んだ隣のベッドに眠るルカも小さな寝息を立てている。

「くっそー、あんなんじゃ全然足りねえよ……………」

一人夕食を済ましたルカは一応シウの為にハムとチーズが乗ったパンを一つ持ってきたのだが、それはとくに食べ終わっている。もしかしたらルカにはちょうどいい量なのかもしれないが、シウとは胃袋の大きさが違う。全然、足りなかった。やっぱり俺も食いに行きゃ良かったな、とシウはひとりごちた。

「ああ、そうだ！」

いい考えが浮かんで跳ね起きる。何もこの宿の食堂で食事を取らなければいけない理由などないのだから、外に行けばいいのだ。これほど大きな港町だ、こんな時間でも開いている店があるに違いなし。金は持っていないが、適当に掻っ払えばいい。

善は急げとばかりに、シウは部屋を飛び出した。

「さあて、適当に酔つ払いでも引つ掛けるか」

一瞬ルカの顔が過ぎつたが、無かつたことにする。長年繰り返してきたことだ、ルカに咎められ罪悪感はあるものの、すぐに止めることなど出来ない。手持ちの金がないなら尚更だつた。

シウの思つた通り、宿のある通りだけでも何軒かまだ明かりが点いている店があるようだつた。酒場の前を通り過ぎれば、酒の匂いと共に豪快な笑い声が聞こえてきた。

歩きながら品定めを始める。その中から、ふらふらと千鳥足で歩く中年の男の背後にシウは近付いた。酔つ払つた男はシウの気配は勿論、その手が懷から財布を抜き取つたことにも気付かなかつた。

「だから、ちよろいんだよ」

あまりの呆気なさにシウは嘆息する。手に入れた布袋を振り、じやらじやらと擦れ合う硬貨の音に思わず頬が緩む。

「さて、何を食うかな」

やっと食事にありつけられると、意気ようつようと歩くシウ。そんな彼の肩に、ぽんと大きな手が置かれる。

「君」

ぎよつとしながらゆっくり振り返ると、そこにいたのは老人だ。

「君、名は何という」

唐突な質問に身構えながら、後ずさる。脳裏に過ぎつたのは、ダヤで盗みを働き腕を切り落とされたゴロツキの姿。

「な、何だよ、じいさん」

「ああ、わしは怪しい者なんかじゃない。君の名を聞きたいだけなんだ。もしや、シウ、という名前ではないかね？」

「え……、どうして俺の名前……」

訝しみながらも、自分の名前をずばり言い当てた老人を見る。

知り合いではない筈だった。そもそもシウはカイランから出たことがなかったのだから、海を挟んだこの町に見知った顔などあるわけもない。

目の前の老人は、見事な白髪と顎髭を蓄えた紳士のように見える。身に纏った衣服も明らかに庶民がまとうものとは違うように思った。

「やはり、君が——シウ、なのだね」

老人の口角が上がる。微笑んでいるが、その目は笑っていないように見えた。

「何だよ、じいさん誰だよ！」

思わず強く言い放ってから、シウは一つの可能性に思い当たった。もしかしたら、この老人はカイランで捕まっていた屋敷の人間なのではないか。罪人である自分を捕えに来たのではないかと。そしてもしかしたら今まさに盗みを働いた所を見られたのかもしれない、と。

「違う、俺は盗んでなんか……」

「ああ、そんなことはどうでもいいんだ。まあ、嘆かわしいことではあるが」

髭をさすり笑う。本能的にその笑みに不気味なものを感じたシウは一步後ずさった。

「ああ……でも、そうだな——盗みは良くないな。盗人がどうなるか分かっているだろう？ シウ君」

にこやかにシウに近付く老人。その窪んだ目がシウの利き腕を見つめた。罪人に与えられる制裁として切り落とされる腕を。

「なに、私の話を聞いてくれれば通報したりしないさ。さあ、来てくれるかな？ 君と二人で話がしたい」

「……分かった」

酒場を指差し提案する老人の言葉を受け入れるしかないシウは、仕方なく頷いた。

## 17・不穏な夜(2)

「じいさん、あんた誰だよ。俺は知らねえはず、だ……多分」

がやがやと騒がしい店内で、シウは先程と同じ質問を、今度は頼りなげに繰り返した。目の前の老人は、頼んだ茶を一口啜り顔を上げると、にこりと微笑んだ。

「私の事を尋ねる前に、君は自分が誰なのか分かっているのかね？」

「は？」

意味の分からない返答にシウは顔をしかめる。しかし同じく店で頼んだ定食を口に運ぶことは忘れない。

「君は、君自身のことをどれだけ知っている？」

口をもぐもぐと動かしながら、おかしなじいさんについて来てしまったな、とシウは後悔した。

老人はシウの返答を待っているのか微動だにしない。まっすぐ自分を見据える視線に耐え切れなくなり、シウは目を逸らした。

「俺は……カイルン生まれ、カイルン育ちの二十歳。それから……母さんと妹がいたけど死んで、親父は顔も知らねえ。それからそれから——」

「母の名は？」

言い淀む言葉を遮るように、再び老人が問う。声が心なしに緊張を帯びているようにも聞こえて、シウは唾を飲んだ。

「母さんの名は……ベリル」

その答えに老人の目が一瞬見開き、口角が上がっていく。やがてくつくつと笑い出すと、いきなり席を立ち上がった。

「やはり！ 運は我等の味方だ。ついに……ついに手に入れたぞ」

その瞬間周囲の人間が一斉に椅子を引いて立ち上がった。あれ程騒がしかった店内は静まり返り、老人の不気味な笑い声だけが響いている。

シウはさすがに箸を置き、辺りを見回した。店内にいた人間は、客はおろか、店員までもが自分達のテーブルに正面を向けている。

「な……何だよ。何だよ、お前ら」

立ち上がった人間達は一步、また一步とシウとの距離を詰めていき、テーブルは完全に囲まれた形になった。それは異様な光景だった。

シウはそこから逃げ出すことも出来ず、その場に立ち尽くす。老人はそんな彼の前にずいっと進み出て、舐めるように全身を見ると言い放った。

「本当に、よく似ている……が、姿だけだな。中身は愚かで粗雑な愚民そのもの」

「ぐみ……ん!？」

それまでの語調とは打って変わって、蔑みの言葉を投げつけた老人に、シウは目を見開いた。

「しかし、それでこそ我等の役に立つ傀儡に成り得るというものだ」

その直後、シウは後ろから羽交い締めになれ、動きを完全に封じられた。

「離せ！ 何しやがる、おい、ジジイっ！」

羽交い締めになれたシウは何とかしてそこから逃れようとするが、どうやらその相手は一人ではないようで、中々上手くいかない。ようやく蹴り上げた足が相手の脛に当たったが、それで脇から首に回された腕が剥がれることはなかった。

「おお、何と下品な言葉遣いだ。嘆かわしい」

汚いものでも見るかのような目を向ける老人。シウは身動きが取れないまま、老人を睨みつけた。

「クソジジイ……っ！」

わけも分からずこんな目に合わせられ怒るが、老人は何の意にも介さないようで、相変わらず不気味な笑い声を上げている。

「さあ、私と来てくれるかな。シウ君」

ここまでできてようやくシウは、自分がこの老人にはめられたのだと気付いたが、その理由は分からなかった。

「……あれ、シウ？」

隣のベッドにシウがいないことにルカが気付いたのは、太陽がわずかに顔を覗かせ、窓から見える空が白み始めた時だった。昨夜食堂から貰ってきたパンが皿から消えているということは、シウが食べたからなのだろうが、その彼の姿も消えている。

ルカは目を擦りながら周囲を見渡したが、あの騒がしい相棒の気配はない。

「トイレかな」

そう呟いて、再びまどろみに身を委ねる。

しかし、あの時シウのことを探しに行けば良かったと後悔するのを、ルカはまだ知らない。

「シウ」

その朝、ルカが目を覚ました時、少年の相棒は戻って来てはいなかった。ここに戻らないつもりではないということは、枕元に置かれたロケット型のペンダントが証明している。では、なぜ——少年は今この場所にシウがいないことを考えあぐねた。

「……まさか」

一つの可能性に思い当たりかぶりを振る。まさか、そんな筈はない。しかし、一度頭に思い浮かんだその可能性は、考えれば考えるほど正しいような気がしてならない。

「でもここはまだリキョウだ。そんな筈は——」

しかし、そこで思い出すのはダヤの一件。ゴロツキに制裁を与えたあの青年。彼の名をルカは知っていた。

イサラ「ユエ」シウルツ——この大陸でその名を知らない者はいない。彼はこの国の皇子だ。亡きシウレスカと第一王妃ラナーヤの息子であり、皇位継承権を持つ現在一番この国の頂点に近い人間なのだ。

次期皇王と呼ばないのには理由がある。それはイサラの持つ皇位継承権より、更に上位の権利を持つ人間がいるかもしれないからだ。第二王妃との間に生まれたイサラの兄——そんな存在の噂が皇都アカツキではまことしやかに囁かれていた。

水面下で元老達は動いている。それは勿論、第一の継承権を持つ人間を探し出す為。

そしてそれこそが、ルカが言う皇都アカツキでのごたごただった。イサラが中央大陸を訪れていたのも、その辺りに理由があるからかもしれない。

ルカはあの時そんな考えに及ばなかったことを酷く後悔した。

「くっ」

ルカはシウが休む筈だったベッドの枕元に置かれたペンダントを手にとった。ロケット型のそれを開けると、中にあったものは写真だった。一人の女性とその娘とおぼしき少女が写った写真。金の髪に青い瞳をした二人はよく似ていた。

「ベリル……」

ロケットを握りしめ、ルカは呟いた。

「おいジジイ、テメー俺を一体どこに連れていく気だよ」

街灯が煌々と夜道を照らす中、そろそろと列をなしたその中間で、シウは横を歩く老人に尋ねた。がしがしと頭を掻くことが出来るのは、手を自由に使えるからだ。にもかかわらず、大人しくついて行くしかないのは、周囲を取り囲む人数があまりに多かったからだ。た。

「君は黙ってついてくればいいのだ。……むしろ、そのような下賤な言葉ばかり吐く口は閉ざしていてくれないか。耳障りだ」

顔をしかめ、心の底から嫌悪するような表情で耳を塞ぐ。その様子が面白くないシウは老人を殴ってやろうかと思ったが、多勢に無勢だとその拳を振るのを止めた。

一体どうしてこんなことに——大きく嘆息して、ひとつまずいことに気付く。

ルカとの約束——世界の最果てへと連れていくことをもし達成出来なければ、《コトダマ》の情報はどうなるのか。そもそも離れ離れになってしまえば、教えてもらうなど土台無理な話なのだ。

「俺、連れがいるんだ。だから戻らねえと！　おい、どけ！　って、ぐえ、掴んでんじゃねーよ、こら」

勢い余って逃走を試みるが髪を引かれ、それは阻止された。その拍子に出た変な声だけが辺りに響いた。

「おい離せよ！ 戻らねえと情報が……情報があ……！」

半ば引きずられるように強引に歩を進められる。シウは後ろ髪を引かれる思いで、足を動かすのだった。

ぞろぞろと歩く行列は、徐々に人気のない通りへと進んで行った。宿や店が並ぶ町の中心地は夜でも活気に溢れていたというのに、今進む道には人っ子一人見当たらず、申し訳程度に街灯が足元を照らすだけだった。どこことなくおどろおどろしく感じて、シウは思わず辺りを見回す。

「お、おい。どこに行く気だよ。なあ、何で俺なんかを連れてくんだよ、俺は金なんか持ってねえんだぞ……そりゃ、ちょっとだけ拝借はしたけどよ」

尻すばみになりながら、シウは老人に疑問をぶつけた。

「……確かに君は、臭いな」

「く、くさ……！？ 馬鹿にすんな、風呂にはさつき入ったつーの！」

「全てにおいて、貧者臭いな君は。その服も、髪も、言葉使いすら、品位というもののかけらも感じない。……全く、嘆かわしい」

大きく嘆息する老人。服に鼻を近付けていたシウは、そういう意味で言われていたというわけではないことに気付き、慌てて鼻を引

つ込めた。

次第に建物の類はなくなり、道は舗装されたものから少しでこばことした道へと変わっていた。その脇にあったのは、数台の馬車。しかしそれはシウが今まで見たことがあるものとは違っていた。彼が今までそうだと思っていたのは、ロバが引く荷台付きのものであって、艶やかな毛並みの馬が引く黒塗りの客車など見たこともなかったのだ。シウは言葉を失い、陸に打ち上げられた魚のように口を開閉した。

「な……な……」

「さあ、乗りなさい。乗り方は分かるかね？」

馬車に辿り着いた行列は足を止め、老人はシウを車内へと促すが、なかなか足を運ぼうとしないことに痺れを切らし、扉を開け有無を言わずに押し込んだ。シウは広い車内に転がるように乗ることになった。車内は広く、皮張りの椅子は肌に吸い付くようで、思わずシウは溜息を漏らす。馬の嘶きと同時に客車が揺れ、馬車は走り出した。結局シウと同じ客車に乗り込んだのは老人のみで、シウが口を閉ざすと、がたがたと揺られる音のみが響いていた。

「……少し君の話を聞かせて貰おうか、シウ君」

長い沈黙を初めに破ったのは老人だった。窓を開け放ち、夜風を一身に浴びるシウに声をかけるが、返ってきたのは生気のない声。そんな彼の顔色は青い。

「おや、酔ったのかね？ いい歳をして情けない」

「……うるせー、俺だって酔いたくて酔ってんじゃねーぞ……」

言葉使だけは強気に、しかし語気は弱い。一瞬顔を室内に戻すが、すぐに外へと向き直す。夜風に当たり続けていなければ、今すぐにも吐いてしまいそうだった。もちろん胃の中は空っぽのままだったのだが。

「まあ、いい。それではベリルは、君の――母君はどうしたかね？  
まだ健在かね？」

そんなシウの様子もお構いなしに、老人は窓辺で力尽きている彼に声をかける。シウは息も絶え絶えに、その問いに答えた。

「母さんは、とつくに……死んだ。それにしたって、ジジイ……何で、母さんのことなんか……」

窓から顔を出したまま呻く。

老人は満足げに髭をさすった。

「そうか、ベリルは死んだか。……当然だな、側仕えごときに手に負えることではないわ」

「……はあ」

風の音に掻き消され、老人の言葉はほとんど届かなかったが、もう一度聞き返す余裕などなかったシウは聞き流すことにした。

「あー……具合悪い……」

そんなシウの姿を見て老人は微かに口角を上げた。

「母に死なれてこそ泥暮らしか。まったく、随分な転落人生だ。君は全てを掴むことが出来る人間であるのに……聞いているかね、シウ君」

いつまでも窓から外に顔を出しているシウにの肩を、枯れ枝のような手が叩いた。青い顔を戻すと、老人はまっすぐその窪んだ瞳を彼に向けている。

思わずシウは唾を飲んだ。

「……な、何だよ」

「シウ＝タイヤン＝シュルツ——君の誠の名だよ。さあ、君の出生の秘密を知りたくないかね？」

老人は不敵に笑った。

## 追憶・願うは叶わぬ君の夢

\*\*\*

「……すまない」

彼は床に臥した女の手を握り、囁いた。白く細い女の手は、その見かけからは想像出来ないほど強い力で、彼の手を握り返した。愛しいと思うと同時に、申し訳なさで胸が詰まり、男は嗚咽を漏らす。その姿は彼の偉業から考えると、誰にも想像できないものであっただろう。事実、人払いをした室内には、彼とその妻であるシャグナしかない。

「……陛下は、悪くありません」

「……すまない……」

シャグナの声は優しく、しかしだからこそ彼の心に突き刺さる。彼女に与えられた仕打ちには、決して許されることではない。何度詫びても、過ぎたことはもう戻すことなど出来ないのだから。

もうそれ以上言葉を続けることが出来なくなり、彼は俯いた。やがてそんな彼の手を握るシャグナの爪が深く刺さっていく。

「私……、陛下の名を頂こうと思っています。陛下のように立

派な志を持つてほしくて」

ぽつり、と呟く。

シャグナは泣いていた。

「でも、私には叶わない夢だったのですね」

細い肩を奮わせ、口元を押さえ涙を流すシャグナを、彼はその腕の中に引き寄せる。

叶わぬ夢——そんなことなど、ありはしない。あつてたまるものか。

しかし、彼女のただひとつの夢が潰えたのは事実だった。

「シウレスカ様……、私は——」

泣き崩れる妻の体を抱き、彼もまた泣いた。栗色の瞳からこぼれた涙を拭うことなく、ただ嗚咽を漏らしていた。

\*\*\*

## 19・告げられた言葉

「まこと……のな？」

聞き慣れない言葉を声に出し、シウは反芻する。がたがたと揺れる車内で青い顔をした青年と、笑みを浮かべる老人は向かい合っていた。

「アカツキの皇王の血を引く者に与えられた名——それが誠名。シウレスカ〓シン〓シュルツ、イサラ〓ユエ〓シュルツ、そしてシウ〓タイヤン〓シュルツ。君の、誠名だ」

「は……、それって……」

「君の父は皇王シウレスカ、そして母は第二王妃のシャグナ。君は皇都アカツキの皇位継承権を持っているのだよ」

車酔いでぐらぐらする頭を押さえ、いつにも増して働かない頭をフル回転させる。

皇王シウレスカ——第二王妃シャグナ——皇位継承権——しかしその言葉の意味すら掴むことが出来なかったシウには、異国の言葉のように聞こえた。

ただひとつ、彼に理解できたのは、老人の言う自分の母は、彼の知る母ではなかったということ。

「ちょ、ちょっと待ってくれよ。俺の母さんの名前は——」

「ベリル。当時、第二王妃の側に仕えていた女の名だ。王妃の出産

以降、行方不明となっていた」

「――!？」

髭を撫で、どこか遠くを見るような目で老人は語り出した。

「第一王妃は第二王妃から君を守る為、君を自分が最も信頼する側仕えのベリルに託した。君がアカツキに産まれ落ち、産声を上げたその瞬間に」

「そんな、こと……大体、守るって何から！」

老人は表情を崩さずに淡々と続ける。

「第一王妃の魔の手から。当時なかなか子を成せない第一王妃ラナ―やは第二王妃の懷妊を妬み、産まれくる赤子の暗殺計画を企てていたのだ。おそらく我が子を守る母の勘が働いたのだろっ、そのことに気付いた第二王妃は君を逃がすことにした」

「……逃がす」

「そうだ。君が母と思っていた人物は、第二王妃の出産に立ち会い、産まれたその瞬間に、君を託されたのだ。死産と偽り、自分の手で慈しむことも叶わぬと知りながら、それでも生かす為に」

「……」

俯くシウの肩を老人が軽く叩いた。顔を上げたシウの前には、真摯な面差しで彼を見据える老人がいる。

「すまなかつたね。第二王妃の決死の決断とはいえ、私達は気付かなければいけなかった。亡骸のない死産、そして消えた一人の側仕え——」

がたがたと車両が道を転がる音が二人の沈黙の間を埋める。

老人の話は突拍子もないもので、シウにとつては容易に信じられる話ではない。しかし、彼の目の前にある顔には、疑うことを許さないような凄みがあつた。

「……」

「ん、どうしたね？ 信じられないかね？ 何故、今更と思うかね？」

「べ、別に……」

調子の悪さも手伝つてか、言葉を続けることの出来ないシウ。老人は口角を上げた。

「今、皇王の座に一番近いのは、第一王妃の子息イサラ——つまりは君の異母兄弟となるのだが、彼は少々危険な思想を持っていてね……困るのだよ、彼が新しい皇王になられては……」

だからこそ君だ、と老人は囁いた。

夜が明け、まだ東の空が白んでいるうちから、ル力は皇都アカツキへと向かうべく準備していた。こんな時間に、しかも子供一人で出発すること、宿の主人は訝しんでいたが、それでも客であるル力に言われた通りに手配した馬車がそろそろ到着するはずだ。

荷物をまとめる手に力が入る。まさかこんなにも早くアカツキに戻ることは思わなかった——もう戻れない、いや戻らないと決めたあの日はいつのことだったろう。そんなことを考えていると、部屋のドアを小さく打つ音が聞こえた。

「お客さん、馬車が着いたよ」

他の客に配慮したノックと小声に、これまた小さくル力は返事をした。

もともと荷物と言っても、量はさほどではない。いくつかの二人の着替えと携帯用の水、それとシウのペンダントだ。それらを袋にまとめたものを抱えると、ル力は扉を開けた。

「ありがとう、馬車はどこに？」

「宿の前にすでに着いているよ……ところで——お連れさんはどうしたんだい」

「ああ、お兄ちゃんは先に出たんだ」

馬車の手配を頼んだ時と同じ質問に同じ答を返す。店主は困ったように眉を下げ、先に階段を下りるル力の後についていく。

「私としては貰えるもんを貰ってるから、何の文句もないんだけど

ね……でももし、君みたいな子供を一人で馬車に載せて何かあったら、店の信用にもかかわるじゃないか」

どうやら店主は、いつの間にかいなくなっていたシウのことや、こんな時間に一人で馬車に乗り出掛けようとするルカに何かしらの警戒心を抱いているようだった。

こんな所で騒ぎを起こしても仕方ないと、ルカは嘆息して懷から布袋を取り出した。

「何もこの宿に不利益になるようなことなんてないよ。これ、とつておいて」

それを見て店主は目を丸くした。ルカの小さな手の上にあるのは、金貨三枚。それは大人一人であれば、ひと月は泊まり続けていられるほどの金額だった。

「こんな大金、受け取れんよ！」

首を左右に振りながらも店主はその金貨から目を離せないでいる。ルカはその言葉が建前でしかないことはわかっていた。

「いいから。こんな時間に手間をかけちゃったお礼だよ。受けとつて」

そう少年に言われると、店主は受け取らなければいけないような気がして、両手で受け皿を作った。ルカは子供らしくにんまりと笑うと、宿を後にした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4578c/>

---

コトダマ

2011年10月10日01時42分発行